

三次元計測を用いた近世刀装具製作技術の考古学的研究

2019年度科学研究費（奨励研究）研究成果報告書

研究課題番号：19H00013

科研費
KAKENHI



2020年3月

研究代表者 村瀬 陸

奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター

三次元計測を用いた近世刀装具製作技術の考古学的研究

2019 年度科学研究費（奨励研究）研究成果報告書

研究課題番号：19H00013

2020 年 3 月

研究代表者 村瀬 陸

奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター

例言

1. 本書は、2019年度日本学術振興会科学研究費（奨励研究）の交付を受けて実施した研究の成果報告書である。

課題名：三次元計測を用いた近世刀装具製作技術の考古学的研究

課題番号：19H00013

研究代表者：村瀬 隆（奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター）

研究期間：2019年度

研究経費：直接経費 530,000円

2. 本研究費を受けて得た成果は本書、および下記の通りである。

【論文】村瀬 隆 2019「近世刀装具鉄型からみた鉄造目貫の判断要素」『古代～中世の「鑄石」「真鍮」の研究 2018年度研究報告』日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）（一般）

村瀬 隆 2020「奈良町道路の刀装具生産遺跡～奈良県奈良市～」『文化財発掘出土情報2020.2』（株）ジャパン通信情報センター

村瀬 隆 2020「近世刀装具における極めの諸問題・西宮市黒川古文化研究所藏伝後藤栄美作目貫から」『合田茂伸館長退職記念論集』同刊行会

3. 研究の実施にあたり、下記の諸氏および機関のご高配を得ました。記して感謝申し上げます。（敬称略、50音順）

阿部功 萩原敬介 謙直直人 上野あさひ 川見典久 北山大熙 熊井亮介 荣原恵一郎 関晃史 高橋潔 内藤俊哉 西山要一 植上昇

平田健 古谷真人 山田耕生 吉田信夫

黒川古文化研究所 神戸市埋蔵文化財センター 京都市考古資料館 京都市埋蔵文化財研究所 東京都教育委員会 東京都教育庁

奈良市埋蔵文化財調査センター 奈良大学

目次

第Ⅰ章 研究の目的と方法 ······ 1

第Ⅰ節 目的 ······ 1 第Ⅱ節 方法 ······ 2

第Ⅱ章 発掘調査出土目貫の計測と所見 ······ 3

第Ⅰ節 奈良町遺跡出土資料 ··· 3 第Ⅱ節 兵庫津遺跡出土資料 ··· 13

第Ⅲ節 京都市内出土資料 ······ 17 第Ⅳ節 東京都内出土資料 ······ 24

第Ⅴ節 発掘調査出土目貫集成 ··· 28

第Ⅲ章 目貫の基礎的研究 ······ 37

第Ⅰ節 認識と問題 ··· 37 第Ⅱ節 鋳造・鍛造技術 ······ 37

第Ⅲ節 加工技術 ······ 39 第Ⅳ節 使用・施棄・伝世 ······ 39

第Ⅴ節 分類・編年研究への展望と課題 ······ 40

附 節 近世刀装具における極めの諸問題 ······ 41

第Ⅳ章 総括 ······ 47

図版出典 引用・参考文献 ······ 48

第Ⅰ章 研究の目的と方法

I 目的

本研究は、SfMによる三次元計測を記録手法として、近世刀装具の製作技法を考古学的な視点とともに明らかにすることを目的とする。

研究代表者は、2018年度より5ヶ年計画による近世鋳造技術の基礎的研究を進めている。初年度にあたる2018年度は、奈良市奈良町遺跡から出土した近世刀装具鋳型を基礎資料とし、その三次元計測を実施して得られた情報から、鋳型の製作技法についてを明らかにした。ここで行われた鋳造は、原型を踏み返す込型技法が用いられていることが明らかとなり、江戸時代初頭から量産を目的とした生産が行われたことがわかった。さらに鋳型のように手彫りするのが困難な資料に対してSfMによる計測が費用対効果の高い方法であることを示した（村瀬2019）。

従来、近世刀装具は、美術品・金工品として鑑賞されてきた経緯があり、美術館や博物館、個人蔵等の伝世資料の多くは鍛造品である。その結果、鍛造により製作されたものが主体的であると認識されがちである。もちろん、鍛造品があることも知られているが、その実態を明らかにした研究はない。しかし、江戸時代初頭より鍛造品が量産された事実が明らかになったことで、既往の認識を改めるべき段階にあると考え、近世刀装具を美術・金工品としてだけでなく、考古資料としても観察することで、資料としての本来あるべき実態を明らかにする必要性があるといえる。

そこで、本研究では、近世を中心に刀装具のなかでもとくに目貫に着目して、製品からみた鋳造・鍛造技術、およびその差を明らかにすることを試みる。これにあたり、これまで顧みられることがなかつた発掘調査出土資料を集成し、その実態を明らかにする。この着眼理由は、江戸時代初頭において鍛造品の量産が確実とされるなかで、その実態は伝世資料でなく発掘調査等で出土する資料に存在するものと予測できるからである。また、発掘調査出土資料は共伴遺物から時期を推定することができる場合があり、出土資料の特徴等を年代と関連させて提示することができる。この基礎分析により、鍛造品の実態解明、目貫の技法的特徴の整理を幾分進めることができると考える。この点をもとに、本研究は近世刀装具の生産実態を解明するための、実物資料に即した観察による基礎的研究を行う。したがって、今後の研究に有益となりうる多様な所見および資料実態を提示することに重点を置く。

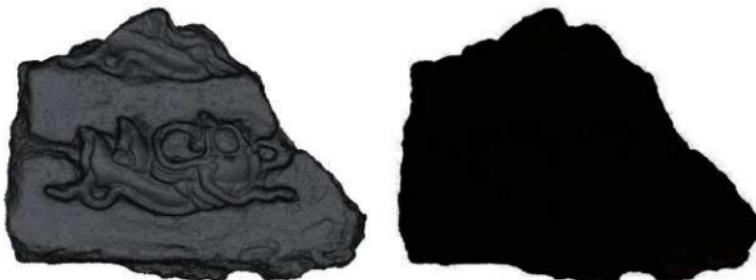


図1 奈良町遺跡出土刀装具鋳型の三次元計測モデル（左）とオルソ写真（右）の比較（拡大）

II 方法

目的を達成するために、本研究では①資料の三次元計測、②資料集成、③目貫研究のための概説の提示にわけて研究を遂行する。

①については、昨年度実施した科研費研究（村瀬 2019）と同様の SiM を用いた計測を実施する。使用機材は、計測用のカメラとして OLYMPUS OM-D E-M1 mark II および NIKON D750、解析・編集用 PC として iMac (64GB・16GB) および Macbook Pro (8GB)、解析ソフトは Metashape（スタンダード版）および CloudCompare である。

計測方法等は昨年度と同様であるが、本研究では計測技術として三次元計測を用いるものの、本報告書では、原則二次元に置き換えて活用・提示することを想定している。また、研究期間が1年間と限られていることをふまえて、計測精度は多少の誤差・欠落を許容し、より多くの資料を処理できる内容の計測を実施した。つまり、従来の手測りによる目貫の実測図や俯瞰写真では、原型の異同や細部表現を比較することが困難であったが、こういった点を確認可能な程度の計測を目指す。よって、点群の粗密による部分的なモデルの不良や、微妙な凹凸を表現しうるだけの精度は満たしていない。この点は、より緻密な撮影や、撮影段階での解析確認等により技術的には SiM でも可能となりつつあるが、時間的制約を考慮して妥当的な計測精度を優先した。

②について、目貫の集成は唯一、東京都出土の刀装具集成が提示されているのみである（宮里 1998）。また、近世刀装具を考古学的に扱った研究は皆無に等しく、集成作業は発掘調査報告書を手当たり次第に探すことにより行った。その結果、全国的に事例を確認することができたが、全てを網羅できてはいないと考える。また、大半の資料は実見に及んでいないため、誤認等も含まれる可能性がある。あくまで、たたき台としての集成と考えて今後の活用を望む。

③については、今後目貫の生産と流通、分類と編年を行っていくための、基礎的研究として行うものである。あくまで、考古学的視点によった概説提示を基本とし、集成と同様、今後の研究のための基礎報告を目指す。

第II章 発掘調査出土目貫の計測と所見

発掘調査で出土した目貫を検討する最大のメリットとして、共伴遺物から年代の定点を得られる可能性があることである。目貫の年代的位置づけは、従来美術的視点に基づき、その意匠や彫金技法から推察されてきた。しかし、これを裏付ける補完の要素に欠ける場合があることから、属性と年代的位置づけが不明確であった。目貫には紀年銘が施されたもののがなく、作者銘が施されたり折紙が附属する場合などがあるが、時期的に後出するものに多く偽銘も確認されている。したがって、発掘調査出土資料をもとに属性抽出・分析を行うことで、分類・編年の基準を得られる可能性がある。

そこで、本章では発掘調査で出土した目貫を集め、その傾向や特徴を抽出する。ただし、本研究期間において全てを網羅し実見観察することは困難であるため、観察し得た資料を三次元計測することで基本情報の抽出作業を行い、補足的に集成から得られる情報を追加する。

I 奈良町遺跡出土資料の検討

i)はじめに

奈良町遺跡は、平安時代以降に興福寺や元興寺を中心として栄えた都市遺跡である。奈良町遺跡では様々な手工業生産が行われ、江戸時代には『奈良図』のように職人の所在を記録した文書も残されている。

ここで検討する資料は、奈良市教育委員会が実施した平城京跡第688次調査で出土したものである。この調査では、17世紀前半の刀装具鋳造関連遺跡が確認されており、炉の痕跡および廃棄土坑を検出している。とくに廃棄土坑からは多数の坩埚、鋳型等が出土し、坩埚のなかでも把手付坩埚・三足付坩埚は蛍光X線分析により真鍮を製造・使用したことが明らかとなっている（奈良市教育委員会2018）。鋳型も蛍光X線分析を実施しているが、二次的に付着したと思われる金属は真鍮であるものの、ほとんど金属付着が認められず、直接的にどの金属が流し込まれたかは明らかにされていない。ただし、共伴関係および鋳型に金属が付着していない状況をみると鉄や銅ではなく、真鍮を流し込んだものと想定されている。

目貫は9点出土しており、いずれも坩埚や鋳型と同様に廃棄土坑から出土している。以下ではこれらの観察所見・蛍光X線分析による所見を提示し、本資料から抽出できる特質を示す。

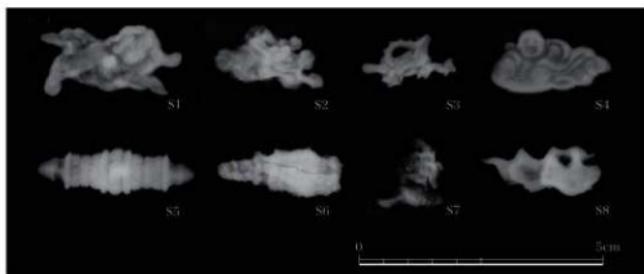


図2 奈良町遺跡(HJ第688次)出土目貫 X線画像(奈良市教育委員会2018)に加筆

ii) 資料の観察所見

奈良町遺跡（HJ 第 688 次）出土の目貫は、概要報告書で X 線画像により 8 点が示されたが、新たに確認したものを含めて 9 点ある。いずれもクリーニングを含めた保存処理を実施済みであるが、取りきれない錆等に覆われている部分が多く、図像の細部が不明瞭なものが多い。資料は奈良市埋蔵文化財調査センターに所蔵されている。以下では各々の観察所見を記す。資料番号は HJ688-S1,2,3…とした。

S1 単獅子団である。完形であり長さ 2.9cm、幅 1.5cm、高さ 0.5cm、金属板の厚さ 0.1cm である。後藤系の意匠であるが、細部は錆に覆われて不明瞭であり、転彫りの痕跡等は確認できない。裏面は打ち込み痕跡などが確認できず平滑な印象を受ける。中央部分に直径 0.3cm、高さ 0.2cm の円形の根が観察できる。根の周囲に留め具や鋲付けした痕跡はない。鍛造品であれば鋲付け痕跡が確認できるため、S1 は鍛造品であると考えられる。

S2 龍団である。約半分程度が残存しており、残存長 2.3cm、幅 1.3cm、高さ 0.5cm、金属板の厚さ 0.1cm である。意匠は、頭部が斜め上方を向き、腕を突き出すものである。錆に覆われて不明瞭であるが、目・髭などの細部を観察できる一方、転彫りの痕跡等は確認できない。裏面は錆等により不明瞭である。

S3 龍団である。約半分程度が残存し、残存長 1.9cm、残存幅 1.0cm、高さ 0.3cm、金属板の厚さ 0.1cm である。錆が少なく残存状態が良好である。脚部の爪や胴部の表現が観察できるが、龍団によくみられる鱗等の細部表現はみられない。裏面は凸凹しているものの、明確な打ち出し痕跡は観察できない。残



図3 奈良町遺跡（HJ 第 688 次）出土目貫 1/1



図4 奈良町遺跡（HJ 第688次）出土目貫



図5 裏面の状態と根 (S1)



図6 銅バリの痕跡 (S3)



図7 裏面の状態 (S4)



図8 銅バリの痕跡 (S4)



図9 銅金の痕跡 (S5)

存部分には根等の付属品もみられない。尾部と脚部との間に本来は抜けてあるべき部分に薄い鉄バリが観察できる（図6）ことから、S3は鋳造品であると考えられる。

S4 布袋図である。完形であり長さ2.5cm、幅1.4cm、高さ0.4cm、金属板の厚さ0.1cmである。大局は把握できるが細部は錫膨れにより不明瞭である。衣をまとい、両手を前にさし出すような意匠である。裏面は錫等に覆われていたためクリーニングによって取り除かれたが、根はなく技法的痕跡は錫により不明瞭である。側面には金属が図像の輪郭から錫状に飛び出る部分が観察でき（図8）、鉄バリであると考えられることから鋳造品と考えられる。

S5 独鈔図である。完形であり長さ3.3cm、幅1.0cm、高さ0.4cm、金属板の厚さ0.1cmである。意匠は突帯で区画されたなかに2条1組の彫り込みがある。突帯上にも竹管文のような彫り込みがあるが、これらが彫り込まれたものか、鋳造によるものかは判別できない。先端部分に比較的良好に鍍金が残存しており、各部の凹部にも鍍金がみられることから、本来は全面鍍金されていたと考えられる。裏面も比較的錫が少ない方ではあるが、錫膨れにより製作痕跡等は不明瞭である。中央部分も根があるよううにみえるが、錫膨れと考えられ根がないとみられる。

S6 独鈔図である。約半分程度残存しており残存長2.5cm、幅1.1cm、高さ0.4cm、金属板の厚さ0.1cmである。錫膨れが酷く細部は不明瞭であるが、先端部分の形状等からみてS5とは異なる意匠の独鈔である。裏面も錫に覆われるが、中央部分に根は観察できない。

S7 意匠不明で一部欠損する。残存長1.4cm、残存幅1.5cm、高さ0.4cm、金属板の厚さ0.1cmである。

S8 意匠不明であるが完形に近い。長さ2.5cm、幅1.1cm、高さ0.4cm、金属板の厚さ0.1cmである。形状から天女図のようにみえるが、細部等不明瞭で判別できない。表裏とも錫に覆われるが、裏面中央部に根は観察できない。

S9 植物系のようにみえるが意匠不明で一部欠損する。残存長1.1cm、残存幅1.0cm、高さ0.2cm、金属板の厚さ0.1cmである。

以上、S1～S9までの資料は、西山要一（奈良大学名誉教授）による蛍光X線分析を実施して頂き、いずれも銅製であることが判明した。なお、S5については銅地金鍍金である。詳細は現在進行中の共同研究の成果報告書で公表を予定している。

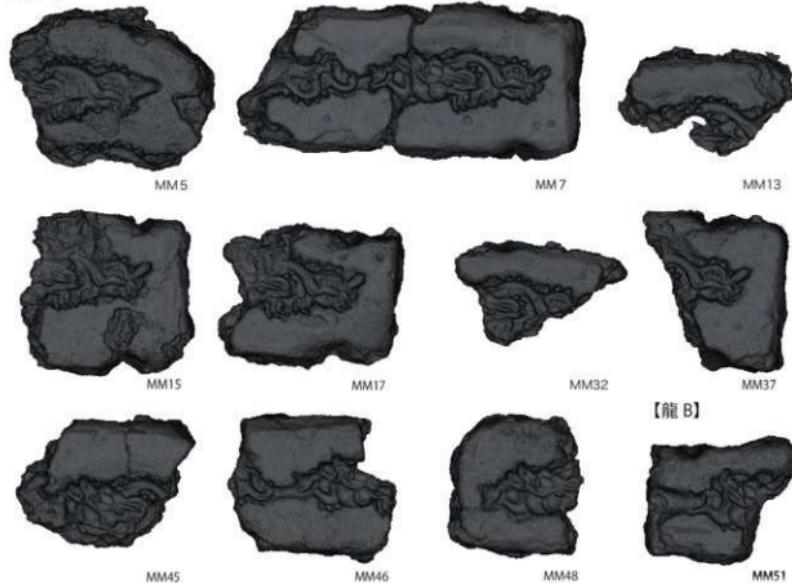
iii) 錫型との比較検討

HJ第688次調査では上記の目貫とともに多数の目貫錫型（約24200点）が出土している。概要報告書段階では肉眼観察のみの所見で図像等不明瞭であったが、SiMによる三次元計測を実施することにより、意匠はもちろん、その製作技法に至るまでを明らかにすることができた（村瀬2019）。ここでは、これらの錫型と目貫製品の比較検討を行う。

まず、錫型のSiM計測モデルを図10～12に示したが、奈良町遺跡では多種多様な意匠の目貫錫型が製作されていたことがわかる。なかでも、龍や天女などは数種類を確認しており、これらが2個1対の表・裏目貫として供給されたものと推察できる。

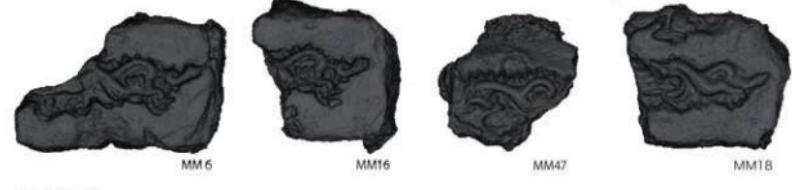
このように多様な錫型を確認した一方、出土した目貫製品と比較すると、意匠の一一致するものが獅子団のみである点に注目できる。龍団や独鈔団は錫型でも確認できるが、製品の意匠は錫型では確認できない。また、布袋団は錫型ではなく、意匠不明であるがS8のような図像も錫型では確認できない。つまり、比率的にみれば製品と錫型が直接的に一致しないのである。

【龍 A】



【龍 B】

【龍 B?】



【見返龍 B】

【見返龍 A】



0 S=1/1 5cm

図 10 奈良町遺跡 (HJ 第 688 次) 出土目貫鋳型 1/1

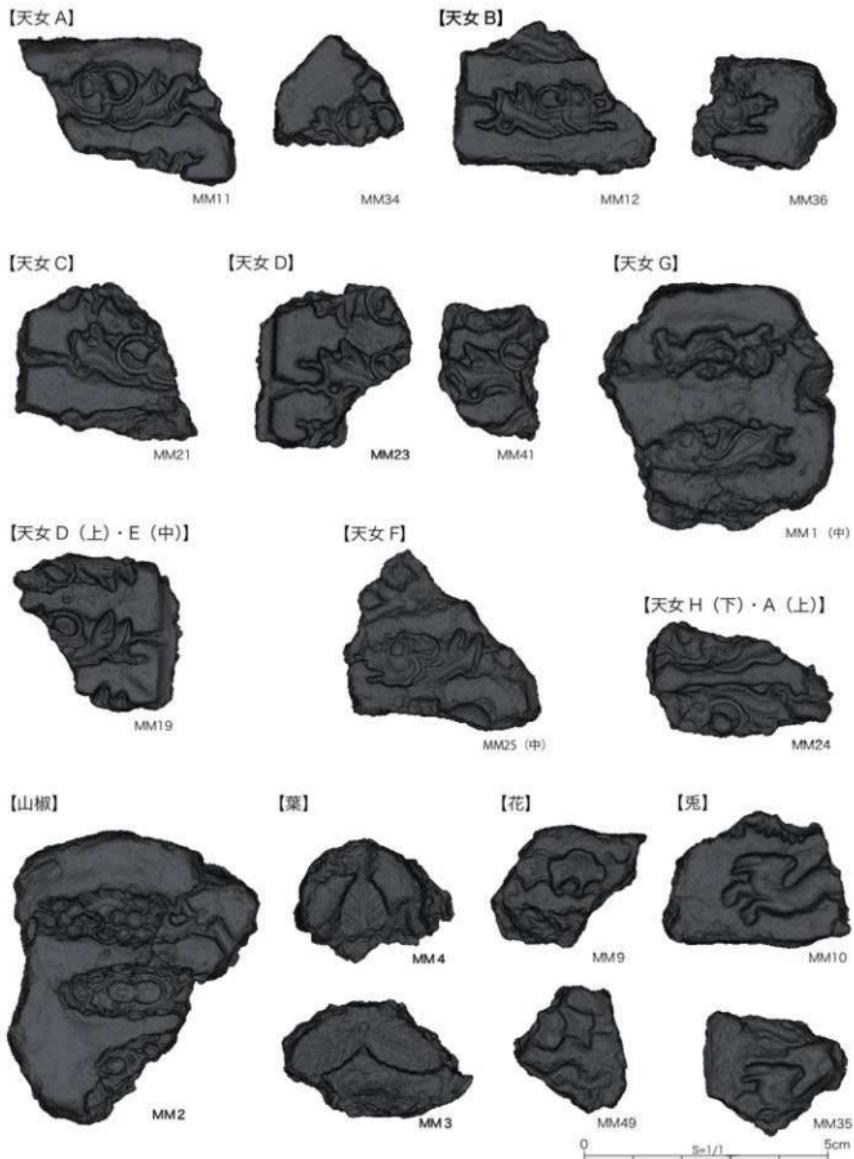


図11 奈良町跡 (HJ 第688次) 出土目貫型 1/1

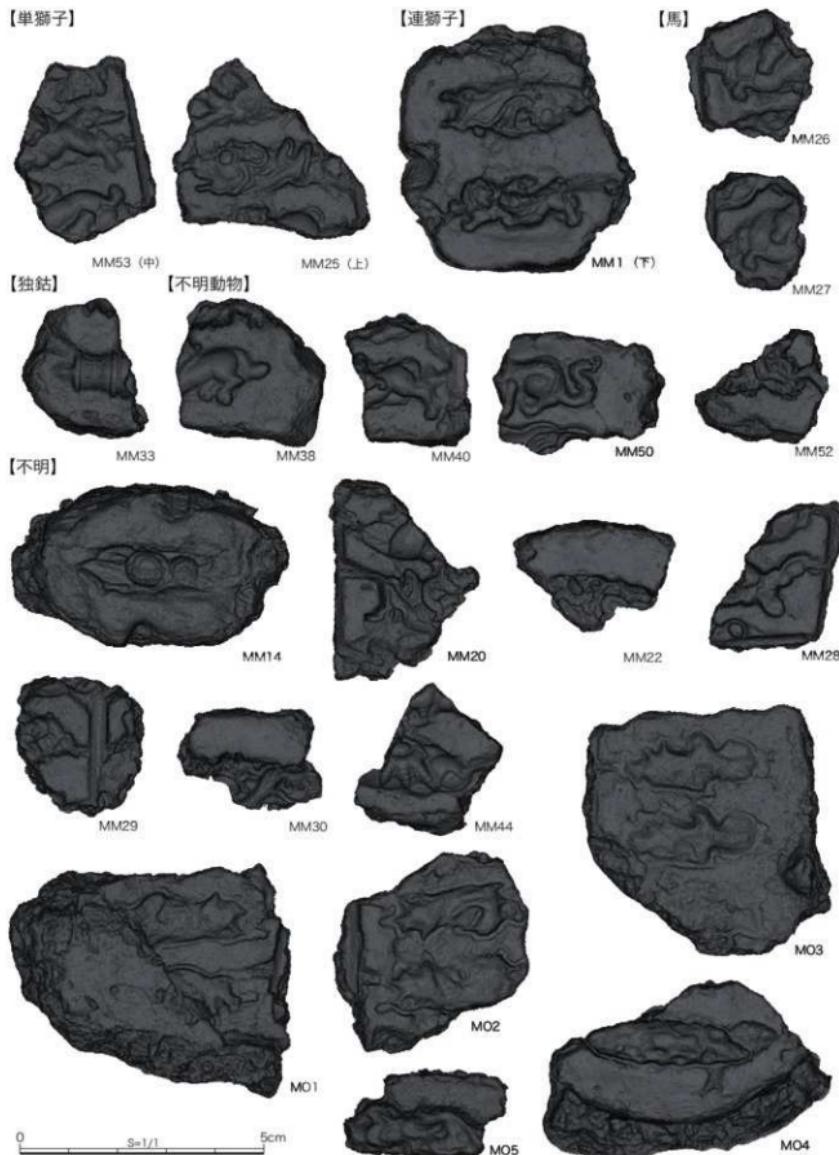


図 12 奈良町遺跡 (HJ 第 688 次) 出土目貫鉢型 1/1

唯一意匠が一致するとみられる獅子図であるが、S1とMM53を三次元モデルで合成した(図13)。製品のS1に鎔流れの影響があるものの、尾の渦状のコブや胸部の肉付きなど平面はもちろん立体的にも一致することが確認できた。つまり、製品のS1は原型としてMM53のような鋳型を作るために用いられた可能性と、鋳型MM53から作り出された製品である可能性がある。

両者の可能性を絞り込むには要因に乏しいが、共伴する多量の把手付壇堀から真鍮成分が検出されていること、これらの目貫が奈良町遺跡の鋳型から鋳造された製品とするには製品と鋳型の意匠が一致しないこと、S5のように鍍金したものが確認できるが、鍍金に必要な道具類の出土が見られないことをふまえると、出土したS1～S9の目貫製品は原型として用いられたもので、他所から持ち込まれた可能性を考えられる。ただし、その場合においても製品と鋳型が一致しない点をどのように解釈するかは課題である。

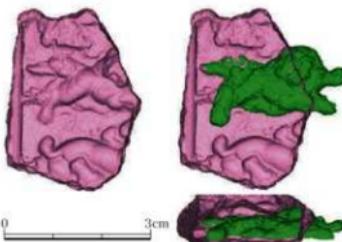


図13 S1(緑)とMM53(ピンク)の合成 1/1

iv) 製品・鋳型にみる鋳造品の特徴

目貫製品について、肉眼観察で鋳造・鍛造品を判別するのは比較的困難である。なぜならば、鋳造品であっても二次的に彫金や研磨等を施すことにより、鋳造痕跡が失われる可能性が理論上成立づかである。鍛造品の場合、裏面には打ち出し痕跡が観察できる場合があるが、鋳造品も鍛造品を原型に用いれば打ち出し痕跡を転写してそれらしく仕上がるることもあり得る。ここでは、奈良町遺跡出土資料から鋳造品と判断できる要素の抽出を行い、その特徴を明らかにする。

iv-1：鋳型及び製品にみる根の仕上げ方法

目貫の裏面には、根と呼ばれる突起状の金属が接合する。これについて、目釘穴に相当する部分に目貫を装着することから、根を目釘穴に差し込み固定する想定がなされたが(若山1974)、根が目貫の高さ以上にならない(さし込めない)ものが多いため、柄に固定するために目貫裏面をムギウルシ等の接着剤で根もろとも埋め込んだ事例が確認できることから、従来の想定は否定的に捉えることができる。しかし、根がどのような機能を果たしたかについて明らかにする根拠は現状乏しく今後の課題である。

伝世資料などの鍛造品をみると、一般的に根は角柱・円柱状を呈し、製品との接合部分は四つ足の力金を用いて籠付けされたものが多い。根やその接合形態がどうであれ、目貫は原則1枚の金属板を打ち出すことで形を作るため、根は基本的に別途接合する必要があるものである。

しかし、奈良町遺跡出土資料ではこれとは異なる方法で根を作り出したことを証明することができる。図14は出土した目貫鋳型の雄型である。雄型は製品でいう裏面に相当するが、中央付近に小さな窪みが観察できるもの(1・2)とできないもの(3・4)がある。前述したように目貫製品の裏面には、一般的に根が施されるものが多い。よって、これらの雄型中央に確認できる窪みは、原型に根が付いた状態のものを用いて型取りしたか、根の部分に窪みを彫り込んだものが反映されたものと考えられる(図15)。したがって、この雄型を用いた鋳造品は、根を別途取り付ける必要がなく備え付けられた状態の製品が出来上がることになる。

実際に出土した獅子団目貫のS1は、裏面に根を確認できるがそれを接合した痕跡が観察できなかった。このことから、S1も鋳造品と考えられ雄型に窪みを施して根を備えた製品が仕上がるようにして製作されたものと判断できる。

つまり、製品としてみた場合に、鋳造品のなかには根を別途取り付けるのではなく、もともと備わったものが存在することをこれらの資料が証明する。鍛造では根を別途取り付けるしか方法がないため、根を後付けした痕跡が確認できなければ鋳造品として判断できる。

iv-2：製品にみる鋳バリ痕跡

鋳造品は鋳型に湯を流し込んで製作するため、湯口や鋳型の隙間等に湯が流れ込むことで、結果として鋳バリが生じることが多々ある。基本的には鋳造後の加工段階で鋳バリは研磨等により取り除かれるが、資料をよく観察することでその痕跡を抽出できる場合がある。

先述したように、奈良町遺跡出土資料のうち、S3・4で鋳バリを観察することができた。S3は本来は抜けてあるべき部分に、指間膜のように薄い鋳バリが観察できる。このような入り組んだ外形の谷間には鋳バリが生じる場合が多い。S4では、側面下部に1mm程度鱗状に飛び出した鋳バリを確認できる。鱗状に残ることからも、鋳バリ処理の研磨は比較的疎かであることが読み取れる。ただし、全くしていないわけではなく、鋳棹部分等は製品をみてもわからないため、一定程度の研磨は施されているものと考えられる。

iv-3) 鋳造品の二次加工

上述したように、S1・S3・S4は鋳造品に認定し得る痕跡を確認することができた。蛍光X線分析の結果や見た目の印象から、その他の製品も鍛造品ではなく鋳造品である可能性が高いと考えられる。

仮に出土資料がいずれも鋳造品であった場合、S5は鍍金を確認できることから鋳造後に二次加工を行ったといえる。S5は裏面に打ち出し痕跡等が確認できないことを含めてより鋳造品である可能性が高い資料である。鋳造品に二次加工を施すことは十分考えられるが、確実な事例はこれまで示されていない。S5に鍍金が施されていることは、鋳造品の二次加工を考える上で重要な知見である。

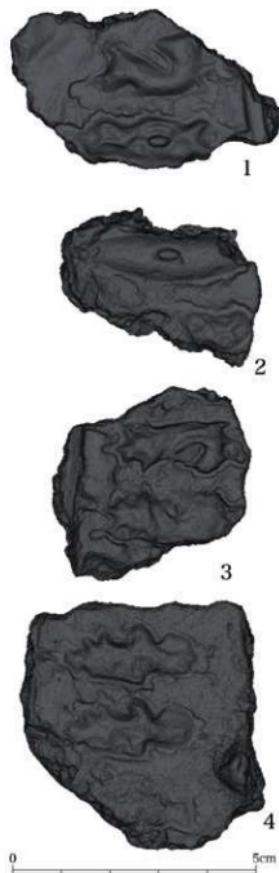


図14 奈良町遺跡出土目貫雄型 1/1



図15 雄型(図14-1)反転モデルでの根復元

v) 小結

以上、奈良町遺跡出土資料の計測結果、及びそれに基づく所見を提示した。奈良町遺跡出土資料では、9点中3点に鉄造品として認定できる特徴を抽出することができた。その他の資料も鉄造品である可能性が高いと推定できる。ただし、これらの製品は共伴した鉄型を用いて作られたものではなく、原型として用いられた可能性があると考えた。

奈良町遺跡出土資料の意義としては、①製品から鉄造の痕跡を抽出できたこと、②製品にみる鉄造痕跡を鉄型の痕跡から相互補完的に証明できたこと、といった鉄造製品の製作技術に関する成果を特筆することができる。

II 兵庫津遺跡出土資料の検討

i) はじめに

兵庫津遺跡は、現在のJR兵庫駅付近を西端とし、神戸中央市場付近を中心部として海岸部に位置する古代～近世の複合遺跡であり、兵庫の津として、様々な物資の流通拠点であった。16世紀後半には兵庫城が築かれ、城郭化が進んだ。以後、大阪の外港として物流拠点の役割を果たしてきたが、1867年の通商条約に伴い兵庫開港を迎える。ただし、これに伴い港は兵庫津遺跡の東側へ移る。これが現在のミナト神戸にみる波止場や外国人居留地といった中心部を形成した。

兵庫津遺跡は、神戸市教育委員会により70次以上の発掘調査が実施されている。多様な遺物が出土しており、刀装具も多く出土している。目貫は複数の調査で出土している。時期を絞り込める資料は少ないが、概ね16世紀後半以降の兵庫城築城以後の製品であると考えられるものである。

ii) 資料の観察所見

兵庫津遺跡出土の目貫は、目貫であるか不明確なものも含めて12点あり、第14・20・21・51・53・62次調査で出土している。今回はそのうち9点を調査した。いずれもクリーニング・保存処理が実施されており、神戸市埋蔵文化財センターに所蔵されている。資料番号は調査次数+報告番号で記す。14次-2357 菊花図である。一部欠損しているが、残存長2.6cm、幅1.5cm、高さ0.9cm、金属板の厚さ0.05cmである。銅製で表面には鍍金が施される。菊花の細部文様等の鑿彫りが観察できる。バリ等がみられず、透かし部分が多くみられ、端部がオーバーハングしていることから鉄造品と考えられる。根は0.7cmと長く、根元は鋒に覆われ不明瞭であるが鍛付けされた可能性が高い。

14次-1835 龍図である。完形であり長さ4.1cm、幅1.7cm、高さ0.6cm、金属板の厚さ0.05cmである。銅製で表面には鍍金が施される。通有の見返り龍の意匠で後藤家が得意とする画題である。表面には鱗を表す線彫りが観察でき、裏面には押し出し痕跡が確認できる。根は折り曲げられている。非常に薄く作られており、バリ等の鉄造痕跡もみられないことから鉄造品と考えられる。

51次-1867 単獅子図である。完形であり長さ3.1cm、幅2.6cm、高さ0.4cm、金属板の厚さ0.1cmである。銅製とみられ、内外面に鍍金が施されている。表面の細部文様は模糊としており不明瞭である。バリは確認できないが、湯口に近いと推定される尾部を中心に多くの巣が観察できる。さらに、尾の端部には鉄棹を切り取ったとみられる研削痕跡が確認できることから、鉄造品であると考えられる。根は長さ0.2cmの円柱状であるが取り付け痕跡がなく、鉄造時に鉄型に彫り込まれたものと考えられる。

53次-328 花図である。一部欠損しているが残存長2.4cm、幅1.5cm、高さ0.3cm、金属板の厚さ

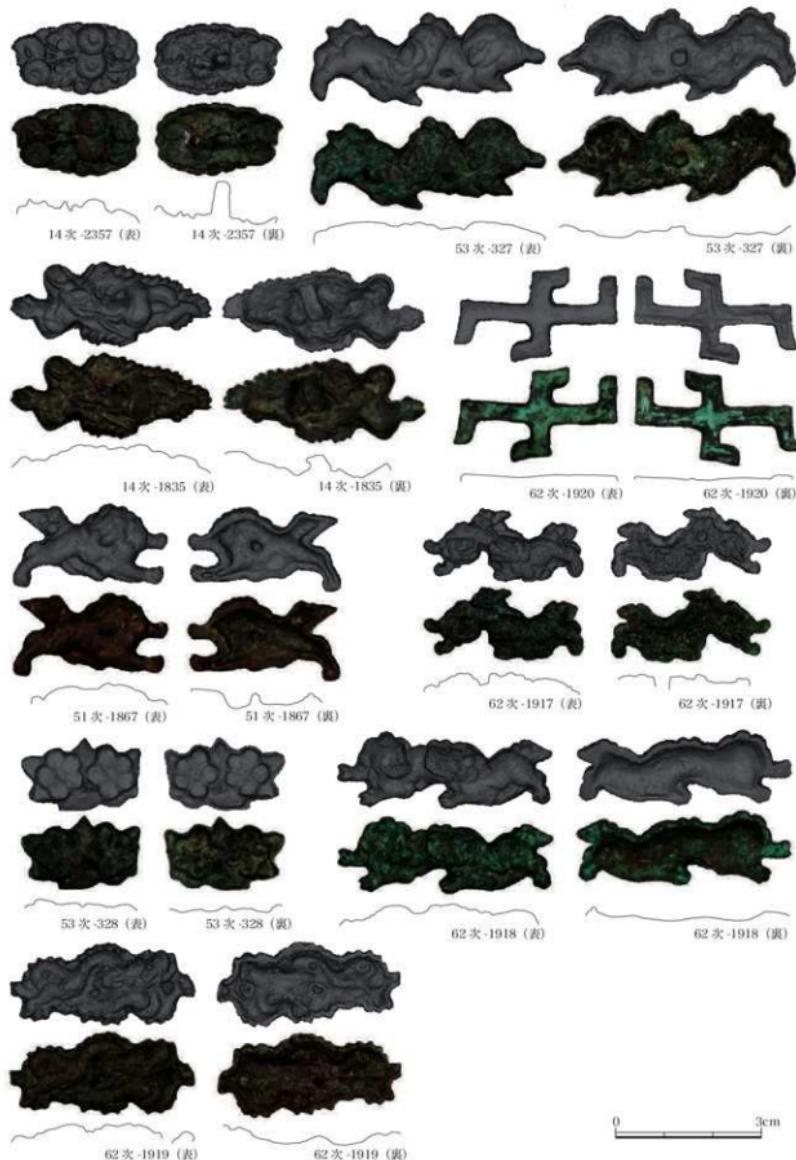


図16 兵庫津遺跡出土目貫 1/1

0.04cmである。銅製とみられ鍍金はない。非常に薄く、裏面にも花の型が明瞭でありプレス品の可能性もある。バリ等の鋳造痕跡や打ち込んだ鍛造痕跡が観察できず、プレス品であるかも含めて技法は不明確である。また、根などもなく目貫以外の飾り金具である可能性もある。

53次-327 連獅子図である。完形であり長さ4.8cm、幅1.9cm、高さ0.5cm、金属板の厚さ0.05cmである。銅製とみられ、表面には鍍金が施される。後藤家が得意とする通有の連獅子に比べてやや太った印象の図像であり、細部文様も模倣として不明瞭である。バリや果などの鋳造痕跡は観察できないが、



図17 鍍金と線彫 (14次-1835)



図18 折り曲げられた根 (14次-1835)



図19 鍍金と彫彫 (14次-2357)



図20 表面の果 (51次-1867)



図21 尾部の研削痕跡 (51次-1867)



図22 備え付けの根 (51次-1867)



図23 裏面の状態 (53次-328)



図24 備え付けの根 (53次-327)



図25 裏面の状態 (62次-1918)



図26 尾部の鉄バリ (62次-1919)

裏面の根は高さ0.1cmと低く、明らかに備え付けのものであることから鋳造品と考えられる。裏面に打ち出し痕跡がみられないこともこれを補強する。

62次-1920 逆円図である。完形であり長さ3.3cm、幅1.9cm、高さ0.2cm、金属板の厚さ0.1cmである。銅製とみられ、鍍金はない。鋳造・鍛造を判断する根拠に乏しく、目貫以外の飾り金具である可能性もある。

62次-1917 連獅子図である。完形であり長さ3.2cm、幅1.5cm、高さ0.5cm、金属板の厚さ0.1cmである。銅製とみられ、鍍金はない。やや小ぶりであるが、厚みがあり重量感がある。表面には細部の線彫りが観察できる。裏面には高さ0.1cmの円柱状の根が確認できるが、取り付けられた痕跡は観察できず備え付けと考えられる。それであれば鋳造品とみられるが根拠にやや乏しい。

62次-1918 連獅子図である。完形であり長さ4.4cm、幅1.4cm、高さ0.5cm、金属板の厚さ0.1cmである。銅製とみられ、鍍金はない。表面は模糊としているが地金はみており、主要な凹凸はあるものの、細部の線彫等はもともと施されていない印象を受ける。バリ等の鋳造痕跡は観察できないが、裏面はかなり平滑であり、打ち込み痕跡が認められず表面状態も考慮すると鋳造品の可能性が高い。

62次-1919 龍図である。完形であり長さ3.8cm、幅1.7cm、高さ0.5cm、金属板の厚さ0.1cmである。銅製とみられ、鍍金はない。表面は錆と砂が混じった状態で処理されており、細部観察の困難な部分が

多いが、全体として鱗等の鱗彫りは観察できない。尾部にバリと思われる痕跡がある。一見すると鱗のようにもみえるが、この意匠では尾に鱗がつかないことからバリの可能性が高い。このことから鋳造品の可能性が高いが、裏面は凹凸が明晰であり裏面だけみると鋳造品のようにもみえる。ただし、鋳造品を踏み返すと凹凸は転写されるため、バリ痕跡を積極的に評価すれば鋳造品の可能性を考えるほうが妥当である。

iii) 兵庫津遺跡出土資料の特徴と評価

兵庫津遺跡出土資料では、9点中5点で鋳造品の可能性が高い所見を得たが、一方で鋳造品とみられるものも確認することができた。とはいっても、半数以上が鋳造品である可能性が高いことは、鋳造品の流通実態を反映する成果といえる。

兵庫津遺跡出土資料でも、奈良町遺跡出土資料と同様に、バリ痕跡や備え付けの根があることで、鋳造品として判別できる成果を得た。また、鋳造品の特徴である鋳造時に発生する巣の痕跡を1点で確認することができ、表面状態の所見から鋳造品を判別するための重要な所見を得た。

また、62次・1919年の龍図は、意匠としては奈良町遺跡出土MM7の鋳型と同一であるが、長さは概ね一致するものの、幅が大きく異なり同型ではない。同様に51次・1867年の単獅子図も奈良町遺跡出土品とは一致しなかった。つまり、典型的かつ通有の意匠であっても複数パターンの原型があり、鋳造品が各地で製作されている可能性を示す。

一方、鋳造品についても興味深い成果を得た。15次・1835年の龍図では、製品の高さを超えないように裏面の根が折り曲げられている。根の用途については不明確であるが、少なくともこの資料からわることは、製品完成までには根を必要とし、完成後不要となったということである。目貫のなかには根があるものとないものがあり、ないものの中には籠付け痕跡だけを留め、本来は根が取り付けられていたと考えられる伝世品がある。発掘調査出土資料は、基本的には当時の人々が使用し、伝世することなく廃棄されたものと考えられるので、根が折り曲げられたのは当時の製作者あるいは使用者によるものと考えられる。これが妥当ならば、根は拵として装着する際には不要なものであり、裏を返せば製作時には必要なものであることがわかる。これについては、さらに資料分析を進めることで明らかにすることができるであろうが、本資料は考古資料として重要な知見をもたらすものである。

III 京都市内出土資料の検討

i) はじめに

平安時代以降、都市として栄え続けた京都市内では、中近世における遺跡も数多く検出されており、発掘調査により多数の近世刀装具が出土している。刀装具製作の最高峰である後藤家も京都を中心に展開することが知られているように、幕府が江戸へ移った後も活発な手工業生産が行われていたと考えられる。以下では、京都市埋蔵文化財研究所が所蔵する目貫の検討を行う。

ii) 資料の観察所見

京都市埋蔵文化財研究所が所蔵する目貫は24点あり、そのうち23点を調査した。多くが平安京跡の調査で出土したものであるが、寺社等からの出土も少數確認できる。資料番号は、京都市埋蔵文化財研究所で付されたもの（調査次数+報告番号）で記述する。

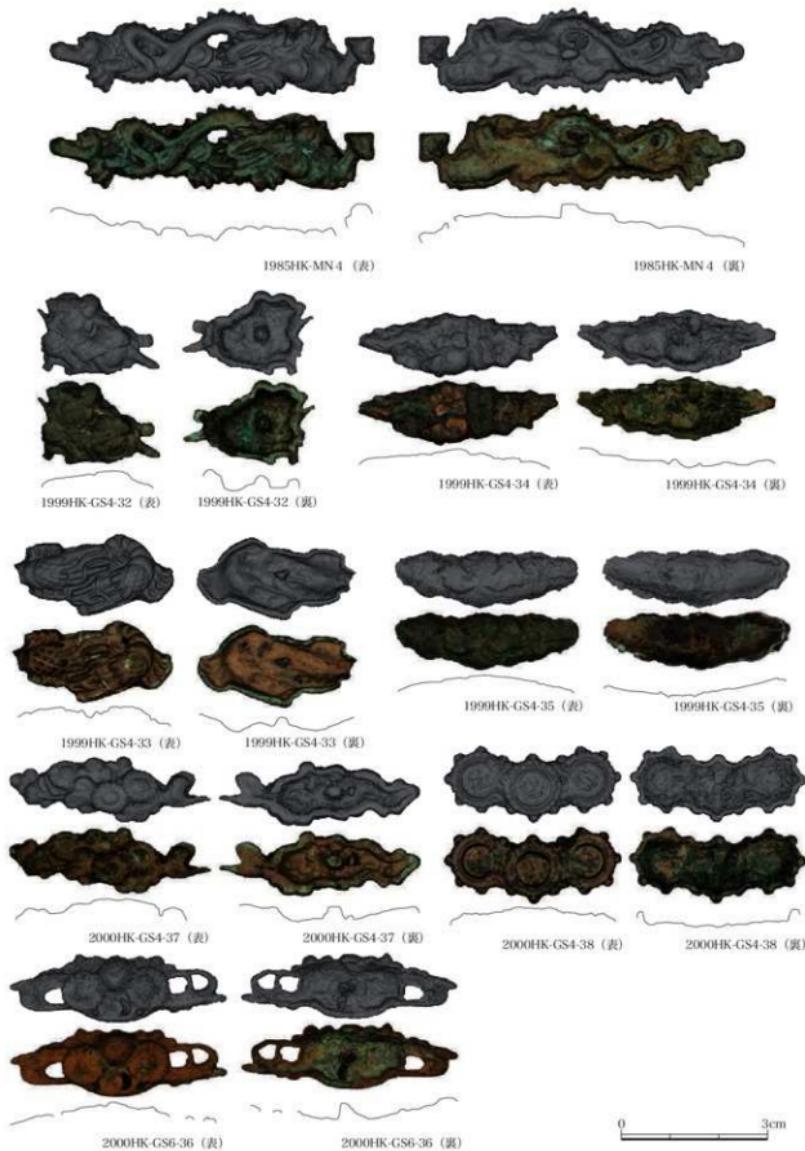


図27 京都市内出土目貫 1/1

0 3cm

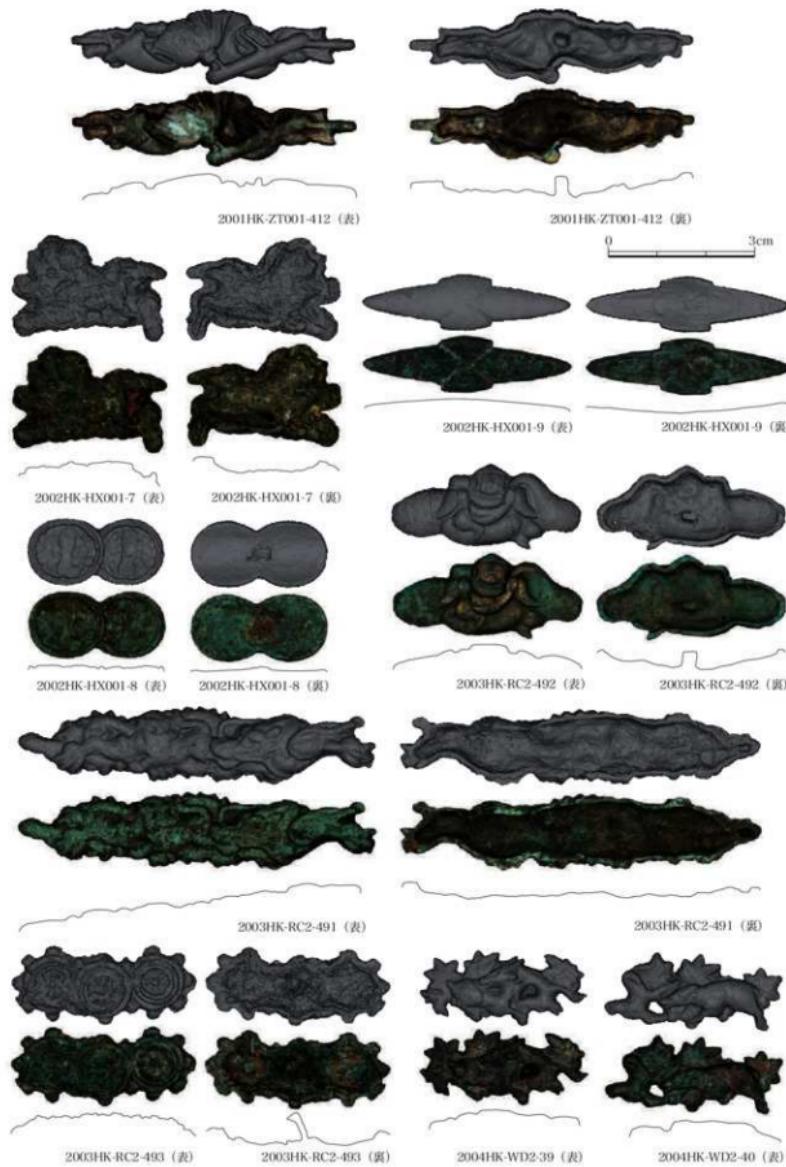


図28 京都市内出土目貫 1/1

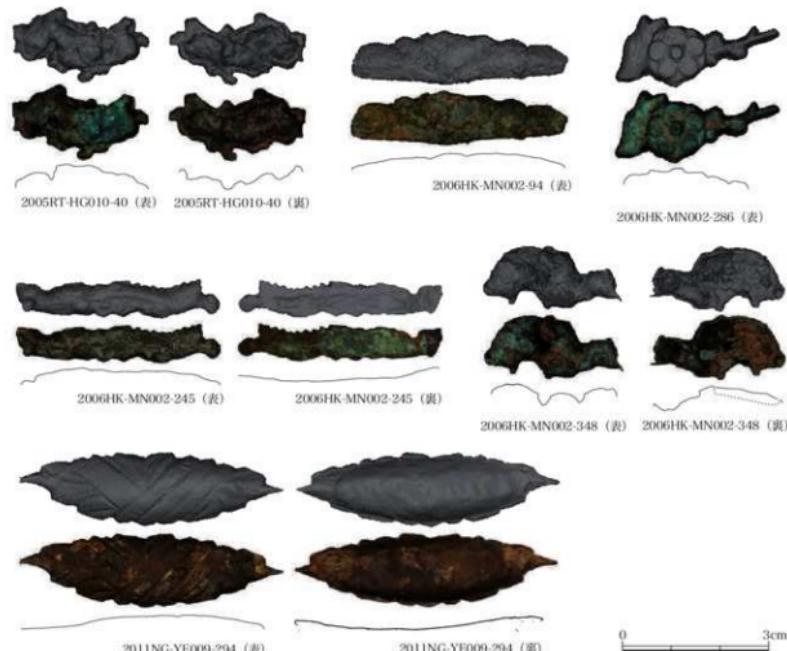


図29 京都市内出土目貫 1/1

1985HK-MN4 龍図である。完形であり長さ 6.7cm、幅 1.8cm、高さ 1.0cm、金属板の厚さ 0.1cm である。わずかに鍍金がみられ、比較的大きな個体である。2次的な要因と思われるが大きく反っている。表面には鱗表現がわずかに観察できる程度で、細かな線彫はみられない。裏面には低い根が観察できるが、取り付けた痕跡は確認できない。バリや巣等はなく、鋳造・鍛造の判別は難しい。

1999HK-GS4-32 武者図である。完形で長さ 2.5cm、幅 1.7cm、高さ 0.4cm、金属板の厚さ 0.1cm である。鍍金がある。表面は主要な表現がみられるのみで、細部の線彫がみられず、人物ものっぽらうに近い。裏面の根は小さく備え付けとみられ、側面にはわずかにバリを確認できることから鋳造品と考えられる。

1999HK-GS4-33 伊勢海老図である。ほぼ完形で残存長 3.3cm、幅 1.6cm、高さ 0.5cm、金属板の厚さ 0.09cm である。鍍金はなく、表面はしっかり彫り込まれていて凹凸がある。裏面には根があるが取り付け痕跡は不明瞭である。側面に図像とは関係がないとみられる出っ張りを研磨したように見える部分があるが、鋳造・鍛造の判別は難しい。

1999HK-GS4-34 花図である。完形で長さ 4.0cm、幅 1.3cm、高さ 0.5cm、金属板の厚さ 0.09cm である。花の部分に鍍金がみられ、部分的に施したものと考えられる。サビにより細部の彫金は不明瞭である。裏面には根があるが、取り付け痕跡は認められない。バリや巣等がなく鋳造・鍛造の判別は難しい。

1999HK-GS4-35 蕉図である。完形で長さ 3.8cm、幅 1.2cm、高さ 0.4cm、金属板の厚さ 0.03cm である。表面の沈線部に金象嵌が施される。非常に薄く、通常の目貫のように凹凸があるのでなく、金属板を緩やかに折り曲げて、表面に壓彫をしたものとみられる。内面が平滑で一見すると鋳造品のようにも見えるが、バリ等もなく表面の壓彫もしっかりしたものであるので、容彫とは異なる鍛造技法により製作されたものと考えられる。

2000HK-GS4-37 菊図である。完形で長さ 4.1cm、幅 1.3cm、高さ 0.5cm、金属板の厚さ 0.13cm



図 30 細部の壓彫 (2000HK-GS4-38)



図 31 端部のオーバーハング (2000HK-GS4-38)



図 32 下地の魚子打ち (2002HK-HX001-8)



図 33 細部の壓彫 (2003HK-RC2-492)

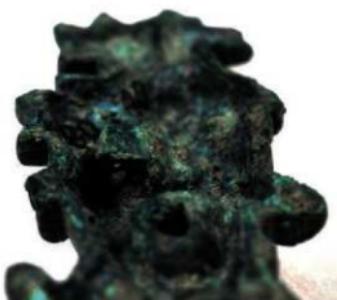


図 34 根の折れ曲り状況 (2004HK-WD2-39)



図 35 鎏金と細部の壓彫 (2011NG-YE009-294)

である。表裏面ともにサビに覆われ細部は不明瞭であるが、花図の表現等大まかな部分は観察できる。比較的金属板が厚く、バリ等の痕跡はみられない。根は高さ0.3cmと比較的しっかりしたものであり、取り付け痕跡は確認できないが、根元にやや膨らみがある。鋳造・鍛造の判別は難しいが、鍛造品の可能性が高い。

2000HK-GS4-38 三双図である。完形で長さ3.6cm、幅1.5m、高さ0.4cm、金属板の厚さ0.06cmである。鍍金は施されていないが、表面は細部にまで鑿影が施されており、非常に精緻な印象を受ける。裏面は端部がオーバーハングしており、鍛造品であるといえる。根は残存しないが、その痕跡がわずかに観察できる。銅質も良く黒光りしており、遺構年代から概ね17世紀中頃と割り出せる優品である。

2000HK-GS6-36 菊水文図である。完形で長さ4.4cm、幅1.4cm、高さ0.4cm、金属板の厚さ0.1cmである。菊の花弁が表現されている程度で細かな彫りはない。バリ等ではなく、側面はくくり出しになつていている。裏面には根があり、やや折れ曲がっていてかつ根元が膨らんでおり、鍛付けしている可能性がある。サビ等で打ち出し痕跡は不明瞭であるが、透かしの抜け穴も大きく鍛造品の可能性が高い。

2001HK-ZT001-412 扇に筒図である。完形で長さ5.8cm、幅1.5cm、高さ0.5cm、金属板の厚さ0.08cmである。わずかに鍍金がみられる。凹凸があり、とくに筒紐の細部に細かな鑿影が観察できる。裏面には根があり一見すると備え付けのようにも見えるが、根元がわずかに膨らんでおり鍛付けされたものと考えられる。表面の細部にみられる鑿影からみても鍛造品と判断できるが、根の所見は鍛造品であってもその取り付け痕跡が判断しづらいことを示す具体例として重要である。

2002HK-HX001-7 獅子図である。完形であり長さ3.1cm、幅2.2cm、高さ0.6cm、金属板の厚さ0.08cmである。鍍金はなく、表裏面ともにサビに覆われて細部の観察ができない。裏面の後足部分が潰れておらず鍛造品のようにもみえるが判断できない。

2002HK-HX001-8 二双（植物）である。完形で長さ2.7cm、幅1.3cm、高さ0.2cm、金属板の厚さ0.1cmである。金属板を折り曲げて表面に鑿影を施して目貫としている。主題である植物図の下地に魚子打ちが確認でき、鍛造品であるといえる。裏面の中心には金属がわずかに盛り上がる部分があり、本来根が取り付けられていたものとみられる。

2002HK-HX001-9 菱形図である。完形で長さ4.2cm、幅1.1cm、高さ0.2cm、金属板の厚さ0.1mである。鍍金や凹凸がなく、重量感がある。サビは少ないが鍛造・鋳造を判断する材料に乏しい。側面には研削痕があり、表面には研磨痕が観察できる。

2003HK-RC2-491 龍図である。完形で長さ7.3cm、幅1.6cm、高さ1.0cm、金属板の厚さ0.1cmである。鍍金があり、比較的大きな個体である。サビにより細部の表現は不明瞭である。裏面は端部がややオーバーハング気味となっており、鍛造品である可能性が高い。

2003HK-RC2-492 大黒図である。完形で長さ3.8cm、幅1.7cm、高さ0.6cm、金属板の厚さ0.1cmである。大黒の人物部分のみ鍍金を施したとみられる。サビに覆われているが、大黒の袋部分に細かな鑿影がみられる。バリ等もなく、裏面の凹凸も明瞭である。裏面には高さ0.3cmとやや高い根が取り付き、根元にやや膨らみをもつことから鍛付けされた可能性が高い。よって鍛造品であると考えられる。

2003HK-RC2-493 三双図である。完形で長さ3.7cm、幅1.6cm、高さ0.7cm、金属板の厚さ0.06cmである。表裏面ともにサビに覆われて観察しづらいが、同一意匠である2000HK-GS4-38に比べて細部の鑿影がみられず、凹凸も少ない印象を受ける。車輪状部分の側面に明瞭なバリが観察でき、鍛造品であるといえる。根は高さ0.6cmと比較的長く、根元が膨らんでおり後付けされた可能性がある。

2004HK-WD2-39 紅葉に鹿図である。完形で長さ3.4cm、幅1.5cm、高さ0.4cm、金属板の厚さ0.1cmである。鍍金があり、表面は細部の葉脈等にまで彫刻が施されている。裏面の根は曲がっており、铸造では製作が困難である。以上より锻造品とみられるが、根の根元には鍛付け痕跡が不明瞭であり、その部分だけで铸造・锻造の判別を行うことは非常に困難と言える。

2004HK-WD2-40 紅葉に鹿図であり2004HK-WD2-39と組み合うものである。完形で長さ3.6cm、幅1.5cm、高さ0.5cm、金属板の厚さ0.1cmである。鍍金があり、裏面の根は根元が盛り上がり取り付け痕跡が明瞭である。根は曲がっているが2次的に折れ曲がったような印象を受ける。

2005RT-HG010-40 連獅子図のようにみえるが不明瞭である。ほぼ完形とみられ長さ2.8cm、幅1.5cm、高さ0.5cm、金属板の厚さ0.1cmである。鍍金はみられず、サビで観察が困難であるが、比較的高さがあり、裏面は打ち込まれたような凹凸がみられることから锻造品の可能性がある。

2006HK-MN002-94 図像不明である。完形で長さ4.3cm、幅1.0cm、高さ0.3cm、金属板の厚さ0.1cmである。表裏面ともにサビ等に覆われ模糊としている。裏面に根はない。

2006HK-MN002-245 龍図のような印象を受ける。完形で長さ4.1cm、幅0.7cm、高さ0.3cm、金属板の厚さ0.1cmである。鍍金はなく、通有の龍図に比べて幅がない。凹凸もすくなく铸造・锻造の判別は難しい。

2006HK-MN002-286 花図である。完形で長さ3.3cm、幅1.5cm、高さ0.5cm、金属板の厚さ0.07cmである。鍍金はなく、表面は細部の彫刻等みられないが、バリ等なく綺麗な印象をうける。比較的薄く、高さがあり锻造品というよりは锻造品の可能性が高いと考えられる。

2006HK-MN002-348 二連動物図であり猪図のようにもみえる。完形で長さ2.8cm、幅1.3cm、高さ0.4cm、金属板の厚さ0.04cmである。サビに覆われて膨影等不明であるが、非常に薄い。裏面には四角柱の根が確認できるが、土が詰まっており根元は不明瞭である。薄さ等から考えても锻造品である可能性が高い。

2011NG-YE009-294 植物図である。完形で長さ5.4cm、幅1.4cm、高さ0.3cm、金属板の厚さ0.07cmである。凹部に鍍金がみられる。薄く、裏面は平滑であるがよくみると折り曲げていく際の打ち込み痕跡が観察できる。表面の葉脈にも彫刻の痕跡が観察でき、锻造品と考えられる。

iii) 京都市内出土資料の特徴と評価

京都市内出土資料では、可能性の範囲であるものを含めて铸造品2点、锻造品14点、判別困難7点という結果を得た。今回調査できなかった平安京左京北辺四坊跡出土の金製獅子図目貫も锻造品であることから、9割近くを锻造品が占める結果となった。この比率は奈良町遺跡や兵庫津遺跡とは異なるものであり、京都の特殊性を反映する可能性があろう。

锻造品が多い結果を得たなかで、その技法でも興味深い知見を得た。すなわち、従来は金属板を押し減じすることで成形する容彫が目貫の锻造手法として知られてきたが、1999HK-GS4-35、2002HK-HX001-8、2011NG-YE009-294のように、金属板を緩やかに折り曲げることで基本形とし、そこに彫影を施し意匠を完成させていくという技法があることが明らかとなった。2002HK-HX001-8は15世紀末の遺構から出土しており、その頃にはこの技法がすでに成立していることも確認できた。

また、伝世品のなかには、根の周囲に四つ足で補強する事例が多くみられるが、锻造品のなかにそれをもつものがほとんど確認できず、なおかつ根の取り付け痕跡が不明瞭であるものを確認した。したがつ

て、根の取り付け痕跡の観察結果のみで鋳造・鍛造を判断するのは危険であり、その他の属性（バリ・果）を加味して判断する必要があることがわかった。

IV 東京都出土資料の検討

i) はじめに

東京都は、江戸幕府の中心地である江戸城や各藩の屋敷跡などがあり、発掘調査も近世を対象としたものが多く、刀装具の出土例も豊富である。また、東京都が所蔵する刀装具は蛍光X線分析が行われており、材質が明らかであることから多様な検討を行いやすい。以下では、東京都教育委員会が所蔵する目貫の検討を行う。

ii) 資料の観察所見

東京都教育委員会が所蔵する目貫は、管見の限り 48 点あり、そのうち 11 点を調査した。萩藩毛利家屋敷跡遺跡出土品が 1 点、他 10 点は尾張藩上屋敷跡遺跡出土品である。報告のための資料番号は、報告書のシリーズ番号等+図版中の資料番号で記す。

hagi48-20 龍団である。完形で長さ 4.1cm、幅 1.3cm、高さ 0.4cm、金属板の厚さ 0.1cm である。表面には鍍金があるが、全体的に錫びて緑色を呈する。構団は見返り龍であるが、鱗など細部の表現が甘く全体的に稚拙な印象を受ける。全体に巣が観察できる。裏面は凹凸があるが打ち込み痕跡は確認できない。バリは認められないが鋳造品の可能性が高いと考える。

III 358-37 報告では獅子？とされているが、欠損やサビで不鮮明になっており不明確である。残存長 2.3cm、残存幅 1.3cm、高さ 0.6cm、金属板の厚さは錫びが詰まっているため不明確である。表面は金箔押しが確認でき、その部分には脚部の爪表現まで鋭い表現が観察できる。金箔押しの剥がれた部分は腐食が進行しており、巣状の穴が認められる。これが腐食によるものか鋳造に関する痕跡かは判別できず、鋳造・鍛造を判別するのは困難である。

III 358-39 雁団である。完形で長さ 2.7cm、幅 1.6cm、高さ 0.4cm、金属板の厚さ 0.1cm である。腐食部分はあるが細継まで表現されている。腐食部分には巣状の穴を観察できるが、腐食していない部分には認められないため、腐食による痕跡と判断できる。裏面には中央付近に根があり、周囲に膨らみがあることから、後付けされたものと考えられる。また、以下に記す個体と組み合う製品と考えられることから、鋳造品であると考えられる。

III 358-40 雁団であり、上記の資料と組み合うものと考えられる。完形で、長さ 2.9cm、幅 1.7cm、高さ 0.4cm、金属板の厚さ 0.1cm である。非常に細かく浅い細線まで表現されている。裏面に根は確認できないが、その周囲を固定した四つ足が残存しており、本来は根があったことがわかる。また、端部がわずかにオーバーハングしていることから、鋳造品と考えられる。

III 358-42 桔梗団である。完形で長さ 4.0cm、幅 1.1cm、高さ 0.3m、金属板の厚さ 0.1cm である。全体的に巣が多数観察でき、細部の表現は確認できない。裏面にも巣が広がっており、わずかな凹凸はあるものの、鋳造品と考えられる。

III 358-43 龍団である。完形で長さ 3.8cm、幅 1.5m、高さ 0.5cm、金属板の厚さ 0.08cm である。蛍光 X 線分析により真鍮製であることが判明している。比較的薄く、全体的に巣が観察できる。銅製のものに比べてやや黄色味が強く、表面の艶さを感じる。裏面には根の痕跡がなく、尾部には窪みがみ



図 36 東京都内出土目貫 1/1

られない。また、抜け穴部分にはバリを確認することができ、鋳造品と考えられる。

V 308-22 牡丹図である。一部欠損しているようにも見受けられ、残存長2.9cm、幅1.3cm、高さ0.3cm、金属板の厚さ0.08cmである。表面は大まかな表現のみで細部表現はみられない。巣が部分的に確認できる。裏面には根がなく、打ち込んだような痕跡も認められないことから鋳造品である可能性が高いと考えられる。

VI 365-7 連獅子図である。完形で3.5cm、幅1.6cm、高さ0.5cm、金属板の厚さ0.1cmである。鍍金は認められないが銅の光沢が良好に残存する。表面は細部の彫金が観察できる部分があるが、例え



図37 金箔押し (III 358-37)



図38 腐食の状態 (III 358-39)



図39 細部の彫金 (III 358-40)



図40 裏面の四つ足痕跡 (III 358-40)



図41 真鍮製品の表面状態 (III 358-43)

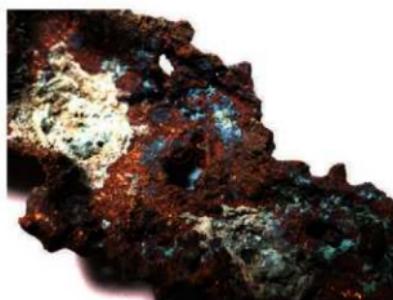


図42 掛け穴のバリ痕跡 (III 358-43)



図43 細部の彫金 (VI 365-7)

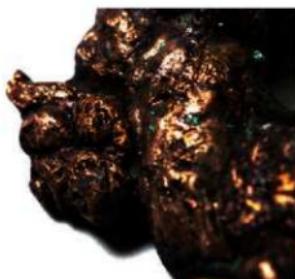


図44 尾部の状態 (VI 365-7)



図45 裏面端部の折り返し状態 (X 198-28)



図46 鰭間のバリ残存状態 (X 211-1)

ば尾部などの線彫は施されていない。巣が部分的に観察できる。裏面は比較的凹凸がしっかりしているものの、鍛造では考え難い金属の付着が認められる。おそらく、鋳造時に離型の合わせ目に隙間があり、湯が流れ込んだものとみられる。よって鋳造品であると考えられる。

X 198-28 水仙図である。完形で長さ3.3cm、幅1.4cm、高さ0.7cm、金属板の厚さ0.05cmである。

表面に鍛金が良好に残存する。多少腐食しているが極めて表面状態がよく滑らかである。花部分の彫り込みは深くしなやかである。裏面には太い根が取り付けられている。端部は折り込むようにオーバーハングしており、鍛造品である。

X 211-1 龍図である。完形で長さ3.8cm、幅1.5cm、高さ0.5cm、金属板の厚さ0.1cmである。鍛金と思われる部分があるが不明瞭である。主要な表現や鱗表現も観察できるが浅い。巣やバリ、抜け穴等は確認できない。尾に近い部分の鰭間に抜けがない部分がある。裏面には根がなく、凹凸も少なく打ち込んだ痕跡は認められず、鋳造品である可能性が高いと考えられる。

X 211-21 意匠は不明確であるが植物系と思われる。完形で長さ3.7cm、幅1.3cm、高さ0.6cm、金属板の厚さ0.1cmである。表面には鍛金があり、巣等はみられない。側面や角部には研削痕跡を確

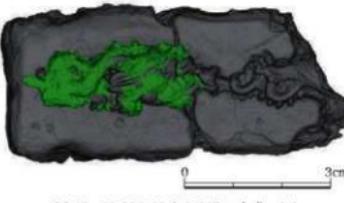


図47 III 358-43とMM7の合成 1/1

認できる。裏面には根があり取り付け痕跡は不明瞭であるが、L字に折れ曲がっている。裏面の端部はオーバーハング気味になっている部分がある。よって、鍛造品である可能性が高いと考えられる。

iii) 東京都出土資料の特徴と評価

東京都出土資料では、可能性の範囲であるものを含めて鍛造品6点、鍛造品4点、判別不明1点という結果を得た。東京都出土資料は全点確認をしていないため、この比率は有効ではないが、奈良町遺跡や兵庫津遺跡のように鍛造品が極少数ということではないようである。この結果は、刀装金工師として名高い京都および江戸の鍛造生産の優位性を示すものであろう。

一方で、鍛造品生産においても興味深い成果を得た。III 358-43 や X 211-1 のように確実な鍛造痕跡としての鉢バリ痕跡を確認できたほか、III 358-43 は東京都による蛍光X線分析の結果、真鍮製であることが明らかとなっている。この龍の意匠は後藤家が得意とする構図の一つであり、鍛造品にも多く模倣されるものである。奈良町遺跡では同一の意匠である鉢型（MM7等）が出土しており、これらを三次元モデル上で重ね合わせた。しかし、大きさはほぼ同一ながら、尾や腕の角度等に違いが認められ、同一原型ではないことがわかった。したがって、III 358-43 は奈良町遺跡で生産されたものではないと言える。この結果は、奈良町遺跡のほかにも真鍮製目貫を鍛造する工房があったことを暗示する。現状、真鍮製品を鍛造するための坩堝は、京都・大阪・岐阜・北九州等の各地で確認されており、上記の結果は想定の範囲内であるが、資料からそれを実証できた点は大きな成果と言える。

V 発掘調査出土目貫集成

本研究にあたり、発掘調査で出土した目貫の集成を行なった。これまで近世刀装具に関する集成は、宮里修によるもの（宮里 1998）が知られるのみで、資料の全体像を把握する基礎作業が急務であった。今回の集成により合計 221 点を確認したが、発掘調査報告書を手当たり次第に検索する方法であるため、見落としや目貫でない可能性を含むものも一部含まれていると考える。また、近世資料は未報告である場合が多くあり、分布等から考察するには未だ不十分である。ここでは今回の集成により、今後検討を進める上で有益となりうる点をまとまる。

まず、発掘調査出土資料の最大の強みは、共伴遺物から年代の推定を行うことができる点である。細かな絞り込みは難しいが、概ね 1 世紀ごとの区分は可能であるように感じる。これにより、出土時期を参考とする属性の推移等を検討できる可能性がある。ただし、刀装具は一定期間、締として使用される期間があり、また貴重品として伝世する。古墳時代の銅鏡と同様に、出土時期をそのまま資料の年代的位置づけに用いることはやや危険を含む。

次に、根の有無については、無いものが 115 点、有るもののが 81 点であった。無いものとしたなかには、本来あったものが欠損したものを含む可能性があるが、根の有無の割合がほぼ同数であることが判明した。根の機能は不明確であるが、これに着目した分析を進めることで、機能を明らかにできる可能性があろう。

番号	遺跡名	所在地	種類	出土箇所	年代	相	備考
文献							
1	矢張跡	北海道小樽市	梅三双	不明	15世紀後半～16世紀前半	有	完存
2	猿田彌跡	青森県弘前市	草花	不明	中世	有	完存
3	猿田彌跡	青森県弘前市	草花	不明	中世	無	完存
4	猿田彌跡	青森県弘前市	花	不明	中世	無	完存。鍍金？
5	猿田彌跡	青森県弘前市	不明	空穴飾	中世	有	完存
6	猿田彌跡	青森県弘前市	不明	膨らみ建築物	中世	無	完存
7	蟹舟寺跡	青森県弘前市	向輪一二双	獨立柱建物	15世紀後半～16世紀前半	無	完存
8	八幡跡	青森県弘前市	油瓶子	不明	中世以降	不明	完存
9	伏見跡	岩手県奥州市	侈口二双	不明	15世紀後半	有	14世完存。鍍金
10	米沢跡	山形県米沢市	大里	腰	17～18世紀	有	完存。鑿裂？
11	米沢跡	山形県米沢市	大里	溝	17～18世紀	有	完存。鑿裂？
12	仙台城丸塹	宮城県仙台市	不明	17世紀以降	無	完存。鍍金	仙台市歴史資料館第1次調査
13	仙台城丸塹	宮城県仙台市	不明	17世紀以降	有	完存	仙台市歴史資料館第1次調査
14	川内B遺跡	宮城県仙台市	ண車道	不明	18世紀	有	完存
15	本保遺跡	宮城県仙台市	不明	包含層	中世	無	完存。鍍金
16	剛田山船跡	宮城県仙台市	不明	整地層	16世紀前半	無	半分残存
17	村松山船跡	宮城県仙台市	龍	不明	不明	不明	一部欠損
18	下伊達城木舟跡	宮城県いわき市	花	造船外	中世以降	無	完存
19	猪木跡	千葉県夷隅郡	獅子	不明	中世	無	完存
20	佐倉跡	千葉県夷隅郡	植物	不明	不明	無	完存。解説
21	佐倉跡	千葉県夷隅郡	千葉県夷隅郡	不明	不明	有	完存。解説
22	石張場工芸跡	東京都墨田区	麗?	土坑	江戸時代	無	完存。解説
23	石張場工芸跡	東京都墨田区	竈?	土坑	江戸時代	無	完存。解説
24	石張場工芸跡	東京都墨田区	三双	土坑	江戸時代	無	完存。解説
25	石張場工芸跡	東京都墨田区	不明	土坑	江戸時代	無	完存。解説
26	石張場工芸跡	東京都墨田区	菱紋三双	土坑	江戸時代	無	完存。解説
27	石張場工芸跡	東京都墨田区	獅子?	土坑	18世纪中期	無	完存。金箔押し
28	石張場工芸跡	東京都墨田区	物	土坑	17世纪中期～後半	無	完存。解説
29	石張場工芸跡	東京都墨田区	麗	土坑	18世纪中期	有	解説
30	石張場工芸跡	東京都墨田区	麗	土坑	18世纪中期	無	解説

番号	遺跡名	所在地	種類	出土品類	年代	根	幅	備考
31	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	弓と矢	地圖	江戸時代	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-1998「花園通上原駄勝道跡」
32	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	枯梗	土坑	18世紀前半	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-1998「花園通上原駄勝道跡」
33	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	龍	土坑	18世紀中期	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-1998「花園通上原駄勝道跡」
34	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	馬	盛土	江戸時代	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-1999「花園通上原駄勝道跡」
35	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	勾渠	土坑	17世紀末～18世紀前半	無	完存。全長、断面、露型による復元模型	東京都埋蔵文化財センター-2000「花園通上原駄勝道跡」
36	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	桔子	包含層	江戸時代	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2000「花園通上原駄勝道跡」
37	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	不明	土坑	18世紀前半	無	半分遺存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2000「花園通上原駄勝道跡」
38	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	牡丹	土坑	18世紀前半	無	1/4比例。解説	東京都埋蔵文化財センター-2000「花園通上原駄勝道跡」
39	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	油槌子	土坑	17世紀末～18世紀前半	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2001「花園通上原駄勝道跡」
40	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	大根	包含層	江戸時代	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2001「花園通上原駄勝道跡」
41	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	不明	包含層	江戸時代	無	1/4比例。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「花園通上原駄勝道跡」
42	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	水仙	土坑	19世紀前半～中期	有	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「花園通上原駄勝道跡」
43	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	菖蒲	不明	江戸時代	有	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「花園通上原駄勝道跡」
44	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	花	薄	18世紀後半～19世紀中期	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「花園通上原駄勝道跡」
45	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	五三桟	土坑	18世紀後半～19世紀前半	無	半分遺存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「花園通上原駄勝道跡」
46	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	不明	土坑	17世紀末～18世紀前半	有	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「花園通上原駄勝道跡」
47	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	兜と刀	不明	江戸時代	無	半分遺存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「花園通上原駄勝道跡」
48	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	兜と刀	不明	江戸時代	無	半分遺存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「花園通上原駄勝道跡」
49	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	龍	薄	19世紀前半～中期	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「花園通上原駄勝道跡」
50	花園通上原駄勝道	東京都世田谷区	桜	土坑	18世紀前半	有	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2006「花園通上原駄勝道跡」
51	市谷本町通跡	東京都世田谷区	蘿蔓?	段切り	17世紀前半	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「市谷本町通跡・甲ヶ谷北地区」
52	市谷本町通跡	東京都世田谷区	花	包含層	江戸時代	有	一部欠損。解説	東京都埋蔵文化財センター-2002「市谷本町通跡・甲ヶ谷北地区」
53	新宿六丁目通跡	東京都世田谷区	油炬	包含層	江戸時代	無	1/4比例。解説	東京都埋蔵文化財センター-2005「新宿六丁目通跡」
54	新宿六丁目通跡	東京都世田谷区	植物	薄	19世紀中期～後半	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2005「新宿六丁目通跡」
55	新宿六丁目通跡	東京都世田谷区	井戸	土坑	18世紀前半	有	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2005「新宿六丁目通跡」
56	外神田山111通跡	東京都世田谷区	鰐	包含層	江戸時代	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2004「外神田山111通跡」
57	外神田山111通跡	東京都世田谷区	大黒	土坑	江戸時代	無	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2004「外神田山111通跡」
58	外神田山111通跡	東京都世田谷区	舟型	土坑	江戸時代	有	完存。解説	東京都埋蔵文化財センター-2004「外神田山111通跡」

番号	通路名	所在地	種類	出土遺構	年代	相 關 考 證
文献						
59	外神田町1丁目通路	東京千人町区 外神田町1丁目	龍	包含層	江戸時代	無 完存。刷製
60	外神田町1丁目通路	東京千人町区 外神田町1丁目	植物	土坑	19世紀前半～中頃	有 完存。刷製
61	丸の内二丁目通路	東京千人町区 丸の内二丁目	植物	土坑	17世紀後半	不明 半分遺存。 秋焼
62	江戸堀跡	東京千人町区 江戸堀跡	植物	土坑	17世紀中期～後半	不明 秋焼で表裏自 然石を用いた層 有 完存。刷製
63	江戸堀跡	東京千人町区 江戸堀跡	植物	土坑	17世紀中期～後半	不明 秋焼で表裏自 然石を用いた層 有 完存。刷製
64	雷門跡	東京千人町区 雷門跡	きのこ他	落ち込み	18世紀前半	有 完存。刷製
65	松落毛呂家原免跡	東京千人町区 松落毛呂家原免跡	龍	包含層	江戸時代	無 完存。刷製
66	落毛呂家原免跡	東京千人町区 落毛呂家原免跡	仙人	土坑	18世紀中期～後半	有 完存。刷製
67	落毛呂家原免跡	東京千人町区 落毛呂家原免跡	板三枚	土坑	近代	無 完存。刷製
68	汐留通路	東京千人町区 汐留通路	不明	不明	不明	不明 秋焼
69	林布忠魚町通路	東京千人町区 林布忠魚町通路	不明	不明	不明	不明 秋焼
70	東京大学本部構内 東京大学文部省地区	花	不明	江戸時代	有 2点	完存。
71	東京大学文部省地区	花	不明	江戸時代	不明	半分遺存
72	東京大学本部構内 東京大学文部省地区	花	不明	18世紀中期以降	不明 半分入金式の可 能性。合意契約書 合意契約書	半分入金式の可 能性。合意契約書 合意契約書
73	東京大学本部構内 東京大学文部省地区	龍	不明	18世紀中期以降	不明 合意契約書	東京大学本部構内 東京大学文部省地区 合意契約書
74	日比谷通路	東京千人町区 日比谷通路	植物	地下室	18世紀前半主体	無 鉄・鋼(「原形復 元」)
75	日比谷通路	東京千人町区 日比谷通路	(アラコ)金 具使用	地下室	19世紀中後主体	無 鉄・鋼(「原形復 元」)
76	泥防町通路	東京千人町区 泥防町通路	龟甲文様	江戸時代	不明 秋焼	有 完存。刷製
77	泥防町通路	東京千人町区 泥防町通路	不明	溝	18世紀末葉～19世紀前半	有 完存
78	泥防町通路	東京千人町区 泥防町通路	不明	溝	18世紀末葉～19世紀前半	有 完存。刷製
79	泥防町通路	東京千人町区 泥防町通路	不明	溝	18世紀末葉～19世紀前半	有 完存。刷製
80	泥防町通路	東京千人町区 泥防町通路	不明	溝	18世紀末葉～19世紀前半	有 完存。刷製
81	泥防町通路	東京千人町区 泥防町通路	不明	溝	18世紀末葉～19世紀前半	有 完存
82	泥防町通路	東京千人町区 泥防町通路	不明	溝	18世紀末葉～19世紀前半	有 半分遺存
83	泥防町通路	東京千人町区 泥防町通路	不明	溝	18世紀末葉～19世紀前半	一部欠損。
84	泥防町通路	東京千人町区 泥防町通路	鳥	溝	18世紀末葉～19世紀前半	無 完存。其底沟

番号	遺跡名	所在地	種類	出土品類	年代	根	備考
85	泥防垣跡	東京都文京区	不明	江戸時代	不明	無	東京建設大公社・文京区埋蔵調査会「文京区埋蔵調査報告書」
86	泥防垣跡	東京都文京区	植物	溝	18世紀末～19世纪前半	無	東京建設大公社・文京区埋蔵調査会「文京区埋蔵調査報告書」
87	泥防垣跡	東京都文京区	不明	溝	18世紀末～19世纪前半	無	東京建設大公社・文京区埋蔵調査会「文京区埋蔵調査報告書」
88	泥防垣跡	東京都文京区	樹	不明	江戸時代	無	東京建設大公社・文京区埋蔵調査会「文京区埋蔵調査報告書」
89	泥防垣跡	東京都文京区	不明	江戸時代	18世紀末～19世纪前半	無	東京建設大公社・文京区埋蔵調査会「文京区埋蔵調査報告書」
90	泥防垣跡	東京都文京区	花	溝	18世紀末～19世纪前半	無	東京建設大公社・文京区埋蔵調査会「文京区埋蔵調査報告書」
91	泥防垣跡	東京都文京区	菱形	溝	18世紀末～19世纪前半	無	東京建設大公社・文京区埋蔵調査会「文京区埋蔵調査報告書」
92	泥防垣跡	東京都文京区	不明	溝	18世紀末～19世纪前半	無	東京建設大公社・文京区埋蔵調査会「文京区埋蔵調査報告書」
93	東山道本陣構内 利尻島屋	東京都文京区 利尻島屋町	植物	地下室	18世纪前半	無	完存。解説 「東京大学構内地盤文化財調査研究年報 1 (1995 年度)」 p.138
94	白壁塗瓦	東京都文京区	輪馬丸者？	クリップ	江戸時代	無	解説 「東京大学考古学研究室 1990 「白壁塗瓦内蔵文化財発掘調査報告書」
95	弓削山遺跡	東京都文京区	植物	タバコ金 木手	19世纪前半から中頃	無	完存。 「東京市立博物館 1997 「白壁塗瓦内蔵文化財調査報告書」
96	馬頭塗瓦路	東京都文京区	植物	クリップ	17世纪以前？	無	解説 「東京市立博物館 2007 「東京市立博物館前半「白壁塗瓦家下塗敷地」」
97	居間跡	高尾山山頂付近	施設	合掌	江戸時代後半から後期	無	完存。 「東京市立博物館 2007 「高尾山山頂付近「白壁塗瓦敷地」」
98	弓削跡	高尾山山頂付近	草履	包含層	16～17世纪後半	不明	部分遺存 「上野町教育委員会 1982 「高尾山山頂付近「白壁塗瓦敷地」」
99	金生塗跡	山梨県甲府市	三枚	包含層	16世纪	無	完存 「山梨県地政課文化財センター 1988 「生糞跡 1 (中川橋)」」
100	松本塗跡	長野県松本市	秋草	包含層	18世纪後半～19世纪	無	部分遺存 「松本市教育委員会 2010 「松本塗 下塗」、飯田町 - 第 1 松原塗在原町 - 」
101	松本塗跡	長野県松本市	蘿	包含層	~17世纪前半	不明	完存 「松本市教育委員会 2002 「長野县长野市本塗下塗跡」、第八次緊急発掘調査報告書」
102	元鳥塗跡	静岡県伊豆郡	蘿	中世以降	不明	一部欠損 「財团法人静岡県埋蔵文化財研究所 2013 「伊豆郡新田西塗跡」、候原古文化探査センター - 漢源在原町」」	
103	岩出塗跡	愛知県名古屋市	桐三枚	蘿	不明	有 「125 帽 「財团法人静岡県埋蔵文化財センター 2002 「岩出塗跡」、候原古文化探査センター - 漢源在原町」」	
104	名古屋三の丸遺跡	愛知県名古屋市	竹林に地	不明	17世纪以降	無	完存 「愛知県埋蔵文化財センター 1990 「名古屋城三の丸遺跡 1」」
105	清洲城町塗跡	愛知県西春日井	二段築	不明	15～17世纪	無	完存 「愛知県埋蔵文化財センター 2002 「清洲城下町塗跡」」
106	清洲城町塗跡	愛知県西春日井	不明	不明	15～17世纪	無	完存 「愛知県埋蔵文化財センター 2002 「清洲城下町塗跡」」
107	三ツガ塗跡	愛知県名古屋市	二段	包含層	16世纪	無	完存 「愛知県埋蔵文化財センター 1989 「三ツガ塗跡」」
108	-水谷食氏塗跡	福井県越前市	繭子	不明	16世纪	有	完存 「水谷牧良 2010 「考古資料における一次水谷氏デジタルアーカイブの活用と新聞」」
109	福井城町塗跡	福井県越前市	植物に繭子	溝	16世纪後半～17世纪前半	有	完存。解説 「福井市教育委員会 2006 「福井城跡」」
110	小寺塗跡	滋賀県守山市	三枚	溝	16世纪末	有	一部欠損。解説 「7～16世纪」
111	園池塗跡	京都府守山市	熨斗	土壌	不明	不明	金製 「財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982 「守山塗跡」」
112	山科塗跡	京都府宇治市	波繩子？	土坛	室町時代	無	完存 「相田有香「山科本塗跡」(4)」、京都府市内遺跡調査報告平成 17 年度」、京都府市文化部

番号	遺跡名	所在地	種類	出土面積	年代	根	備考
東・北(東園寺)							
113	平安京東園寺	京都府京都市	瓦	包含層	江戸時代	有	完存。既存
114	平安京東園寺三条一	京都府京都市	瓦	包含層	江戸時代？	有	完存。既存
115	平安京東園寺二	京都府京都市	龍	包含層	「通」動物	有	完存。既存
116	平安京東園寺三	京都府京都市	花	包含層	不明	土坑	「通」？
117	平安京東園寺四	京都府京都市	龍	包含層	不明	土坑	「通」
118	平安京東園寺五	京都府京都市	不明	包含層	江戸時代中期	黒	「通」
119	平安京東園寺六	京都府京都市	不明	井戸	近世	有	「通」
120	平安京東北切四	京都府京都市	騎馬武者	土壘	不明	半分遺存。剥離？	財团法人京都府明文化財研究所 2002 「東・北(東園寺)」
121	平安京東北切五	京都府京都市	伊勢工七	包含層	不明	有	半分存。剥離？
122	平安京東北切六	京都府京都市	花	穴藏	17世紀後半	有	完存。剥離？
123	平安京東北切七	京都府京都市	龍	穴藏	17世紀後半	無	剥離？既存
124	平安京東北切八	京都府京都市	菊水文	土壘	18世紀前半	有	完存。剥離？
125	平安京東北切九	京都府京都市	菊花	包含層	不明	有	完存。剥離？
126	平安京東北切十	京都府京都市	三双	土壘	17世纪中期	有	完存。剥離？
127	平安京東北切十一	京都府京都市	獅子	土壘	17世紀後半～18世紀初期	無	金銀
128	平安京東園寺一	京都府京都市	串聯子	土坑	17世纪中期	無	完存。剥離
129	平安京東園寺二	京都府京都市	二双	土坑	15世纪末	無	完存。剥離
130	平安京東園寺三	京都府京都市	菱形	土坑	不明	無	完存。剥離
131	平安京東園寺四	京都府京都市	龍	包含層	镰倉～江戸時代前半	無	完存。既存
132	平安京東園寺五	京都府京都市	大黒	包含層	镰倉～江戸時代前半	有	完存
133	平安京東園寺六	京都府京都市	三双	包含層	镰倉～江戸時代前半	有	完存
134	平安京東園寺七	京都府京都市	虹雲に龍	包含層	不明	土坑	「通」
135	平安京東園寺八	京都府京都市	虹雲に龍	包含層	不明	土坑	「通」
136	奈良泉跡	京都府京都市	植物	地盤	江戸時代	無	完存。既存
137	奈良泉足跡	奈良県奈良市	单握手	土坑	17世纪的半	有	完存。
138	奈良泉足跡	奈良県奈良市	龍	土坑	17世纪的半	無	半分遺存。剥離
139	奈良泉足跡	奈良県奈良市	龍	土坑	17世纪的半	不明	「通」。剥離
140	奈良泉足跡	奈良県奈良市	布袋	土坑	17世纪的半	無	完存。剥離

番号	遺跡名	所在地	種類	出土範囲	年代	根	根 幅	備考
141	奈良町遺跡	奈良県奈良市	施丸	土坑	17世紀前半	無	完存	奈良市農業研究会 2018「平城宮跡(生駒四条六丁目)・奈良町遺跡の調査 第0888次」『奈良市農業研究会』
142	奈良町遺跡	奈良県奈良市	施丸	土坑	17世紀前半	無	一部欠損、崩壊	奈良市農業研究会 2018「平城宮跡(生駒四条六丁目)・奈良町遺跡の調査 第0888次」『奈良市農業研究会』
143	奈良町遺跡	奈良県奈良市	不明	土坑	17世紀前半	無	半分遺存、崩壊	奈良市農業研究会 2018「平城宮跡(生駒四条六丁目)・奈良町遺跡の調査 第0888次」『奈良市農業研究会』
144	奈良町遺跡	奈良県奈良市	不明	土坑	17世紀前半	無	14.5cm完存、崩壊	奈良市農業研究会 2018「平城宮跡(生駒四条六丁目)・奈良町遺跡の調査 第0888次」『奈良市農業研究会』
145	奈良町遺跡	奈良県奈良市	秋草	包含層	中世?	有	完存、崩壊	奈良市農業研究会 2017「奈良宮跡遺跡の調査、第185次」『奈良文化財研究会記要 2017』
146	都府跡(都堂院)	奈良県奈良市	花夷	不明	13~16世紀	無	完存	奈良市農業研究会 2011「都府跡第1次~4次発掘調査報告書」
147	深堀跡	奈良県奈良市	木造柱/柱地	土坑	17~18世紀	無	完存	奈良市農業研究会 2005「久宝寺寺内附属施設、第1次発掘調査報告書」
148	久宝寺寺内附属施設	奈良県奈良市	木造柱/柱地	土坑	17世紀以降	有	完存	奈良市農業研究会 2005「久宝寺寺内附属施設、第1次発掘調査報告書」
149	大坂町跡	大阪府大阪市	包含層	包含層	16世紀後半以降	有	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡発掘調査報告」
150	大坂町跡	大阪府大阪市	菊花	包含層	16世紀後半以降	有	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
151	大坂町跡	大阪府大阪市	不明	土坑	16世紀後半以降	無	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
152	大坂町跡	大阪府大阪市	巴三双	包含層	16世紀後半以降	有	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
153	大坂町跡	大阪府大阪市	施丸	包含層	16世紀後半以降	無限	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
154	大坂町跡	大阪府大阪市	花角三双	包含層	16世紀後半以降	限限	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
155	大坂町跡	大阪府大阪市	扇三双	包含層	16世紀後半以降	有	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
156	大坂町跡	大阪府大阪市	馬	包含層	16世紀後半以降	無	完存。脚立り有	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
157	大坂町跡	大阪府大阪市	大黒	包含層	16世紀後半以降	有	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
158	大坂町跡	大阪府大阪市	大黒	土坑	16世紀後半以降	有	完存。ウツリ有	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
159	大坂町跡	大阪府大阪市	牡丹	包含層	16世紀後半以降	無	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
160	大坂町跡	大阪府大阪市	桃栗	土坑	16世紀後半以降	無	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
161	大坂町跡	大阪府大阪市	秋草	包含層	16世紀後半以降	無	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
162	大坂町跡	大阪府大阪市	植物	包含層	16世紀後半以降	無	限全、葉茎	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
163	大坂町跡	大阪府大阪市	不明	包含層	16世紀後半以降	無	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
164	大坂町跡	大阪府大阪市	不明	包含層	16世紀後半以降	無	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
165	大坂町跡	大阪府大阪市	竹?	包含層	16世紀後半以降	無	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
166	大坂町跡	大阪府大阪市	竹?	包含層	16世紀後半以降	無	完存	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 II」
167	大坂町跡	大阪府大阪市	二連動物	不明	16世紀後半	有	完存	大阪府文化遺産研究センター 2006「大阪城跡 III」
168	大坂町跡	大阪府大阪市	夕顔	落ち込み	17世紀以降	有	完存	大阪府文化遺産研究センター 2016「大阪城跡 7」
169	大坂町跡	大阪府大阪市	籠	土坑	16世紀後半	不明	著された状態、蓋 裏面直有	大阪府文化遺産研究センター 2002「大阪城跡 III」

番号	遺跡名	所在地	種類	出土箇所	年代	相 模 考
170	兵庫道跡	兵庫県神戸市 兵庫県神戸市	見送籠	土坑	16世紀末～17世紀	有 完全。腰金、鍔造
171	兵庫道跡	兵庫県神戸市	菊花	不明	16世紀	有 完全。腰金、鍔造
172	兵庫道跡	兵庫県神戸市	葵三双	包含層	17世紀以降	不明 完存
173	兵庫道跡	兵庫県神戸市	不明	町屋	17世紀後半～18世紀	不明 完存
174	兵庫道跡	兵庫県神戸市	動物	不明	13～16世紀	無
175	兵庫道跡	兵庫県神戸市	单體子	土坑	16～18世紀	有 完全。腰金、鍔造
176	兵庫道跡	兵庫県神戸市	複體子	包含層	15世紀以降	無
177	兵庫道跡	兵庫県神戸市	花	焼土層	17世紀以降	部分遺存。鍔造
178	兵庫道跡	兵庫県神戸市	透彫子	建物	17世紀以降	無 完全。鍔造
179	兵庫道跡	兵庫県神戸市	透彫子	建物	17世紀以降	無 完全。鍔造
180	兵庫道跡	兵庫県神戸市	龍	建物	17世紀以降	無 完全。鍔造
181	兵庫道跡	兵庫県神戸市	透正	包含層	17世紀以降	無 完全。鍔造
182	水路跡	兵庫県尼崎市 兵馬山地区	枕草	北2坪	不明	有 完全。腰金
183	可馬寺山1号墓跡	兵馬山地区	不明(解釈)	地盤施設	14～16世紀	財團法人大阪府文化財団文化部文化遺産 2004 「可馬寺山1号墓跡」
184	附近跡	施鳥島集野郡	三双	庭園	16世纪後半	不明 完全
185	新野1号墓跡	高知県野市町	木の莢	包含層	14～16世紀	不明 半分遺存
186	萩塚跡	山口県東市	牛	江戸時代	包含層	無 完全。鍔製
187	萩塚跡	山口県東市	龍	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
188	萩塚跡	山口県東市	不明	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
189	萩塚跡	山口県東市	不明	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
190	萩塚跡	山口県東市	菊	江戸時代	包含層	無 完全。鍔製
191	萩塚跡	山口県東市	馬	江戸時代	包含層	無 完全。鍔製
192	萩塚跡	山口県東市	凤凰	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
193	萩塚跡	山口県東市	植物	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
194	萩塚跡	山口県東市	牛	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
195	萩塚跡	山口県東市	蜘蛛文	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
196	萩塚跡	山口県東市	獅子	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
197	萩塚跡	山口県東市	菊	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
198	萩塚跡	山口県東市	牛	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
199	萩塚跡	山口県東市	兔	江戸時代	包含層	有 完全。鍔製
200	博多塚跡群	福岡県福岡市	不明	16世紀後半以降	不明	無 完全

第III章 目貫の基礎的研究

I 認識と問題

目貫は、刀の柄の表裏に取り付ける装飾品である。柄は一般に刀装とも呼ばれ、目貫を含む各種小道具からなる。刀装小道具のことを略して刀装具と呼ぶ。目貫は笄・小柄とともに三所物と呼ばれ、金工師の多くはこれらをセットで製作していた。

目貫は一振りの刀に対する柄に2点装着されることから、2個1対であることが基本である。同様の目貫を2点使用する場合もあるが、多くは意匠が同じであっても表現が異なるものをセットとする場合が多いようである。用途としては、目釘穴の位置にくる場合が多いことや、目貫の裏面に根と呼ばれる突起物が取り付けられていることから、目釘穴に差し込むものと考えられることがあった（若山1974）が、根の長さや現物事例（図49）からみて、目釘穴に差し込んで使用するものではないようである。ただし、根の用途については明らかではない。

製作技法については、鍛造と鋳造があることが知られているが、それぞれどういった方法であったかを追求した研究はほとんど提示されていない。また、両者の関係性についても不明な点が多く、刀装具生産がどのような体制をもとに行われていたのかは明らかでない。この点については今後の課題であり、筆者は鋳造品生産の一部を解明することから始めている（村瀬2019）。

一方、彫金技術については、主に美術・金工学的視点から分析が進められており、技法等の分類がなされている（川見2016）。ただし、これらの技法が年代の推移とともにどのように変化していくのかを証明するには至っていない。

以上のように、目貫をはじめとする近世刀装具は美術品として扱われてきたため、その製作技法や生産体制、および資料の現状把握等がほとんど解明されていない状況といえる。したがって、これらを着実に基礎研究することが目先の課題であるといえよう。

II 鑄造・鍛造技術

目貫の地金は銅が多く、金や真鍮などを用いる場合もある。これらの金属を鍛造・鋳造技術を用いて目貫の製品として仕上げていく。一般論で言えば、鋳造品は大量生産することが可能であるが、完成品は粗雑になる場合が多く、鍛造品はその逆を期待することができる。

鋳造品の場合、製品は鋳型に湯を流し込むことで成形する。目貫の「鋳型」には2種類あり、文様鋳型と実用鋳型がある。文様鋳型とは、製品の原型を粘土等に押し付けて作った離型であり、原則雄型は存在しない。発掘調査では、一乘谷朝倉氏遺跡や北畠氏館跡遺跡等で出土事例があり、伝世品では後藤四郎兵衛家伝来品等にみることができる。これらの文様型には雄型や湯口がないことから、実用的な铸造に用いられたものではなく、離型に松ヤニや粘土を押し付けて製品見本を作るためのものといった見解が提示されている（津市教育委員会2009）。一方、久保智康は文様鋳型に金属を打ち付けて製品を製作するためのものである可能性を指摘している（久保2009）。いずれにしても、文様鋳型は铸造に関わるものではないことは確かである。

他方、実用鋳型は実際に铸造に用いるための鋳型である。目貫の実用鋳型は現在のところ奈良町遺跡出土品が唯一の資料である。実用鋳型には湯口や铸枠の痕跡があり、二次被熱により黒色化しているほ

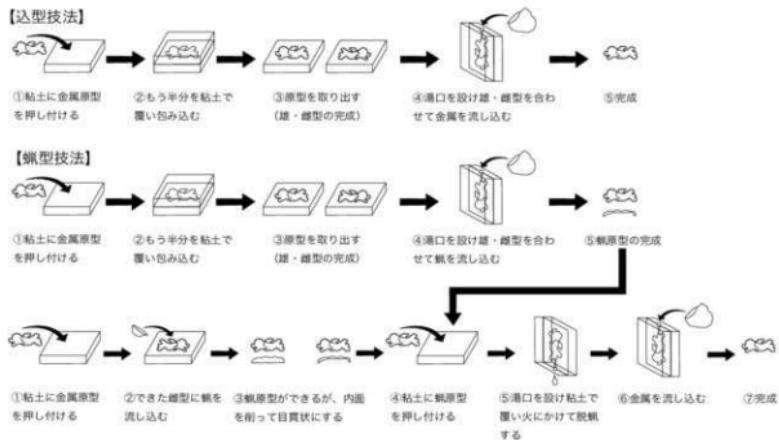


図48 目貫鋳造技法の工程模式図

か、文様面にきめ細かな真土を用い、その外側はガス抜きのためスア混じりの粘土を用いるという二重構造をもつ。これらの鋳型は、込型技法により製作されており（村瀬 2019）、量産を目的としたことがわかる。

鋳造品の目貫には、大きく3つの特徴がある。まず、鉛バリをあげることができる。鍛造であれば金属の縮れ部分等が観察できる場合はあるが、バリのような痕跡は残り得ないため、鋳造品を判別する最も根拠となりうる。次に、小さな気泡状の穴があく巣も鋳造品の特徴である。これは、鋳造時に空気を含むことで起こり、製品の表面等に観察できる場合がある。ただし、本研究でも所見を提示したが、発掘調査出土資料の場合、長年土に埋もれていたことで腐食し、巣状にみえる場合がある。伝世品であれば巣状の痕跡を巣として断定できるが、出土品の場合は注意が必要である。最後に根の取り付け具合も判断材料となる。奈良町遺跡出土鋳型のなかには、原型の根を転写して雄型中央が窪むものが確認できた。つまり、鋳造品の目貫は、備え付けの根がある場合がある。もちろん、根のない鋳造品に根を後付けすることも可能であるので、備え付けの根であることを確認できれば、それは鋳造品と判断できる。ただし、鍛造品の根のなかにも、上手く鐵付けすることで取り付け痕跡が不明瞭なものが存在するため、注意が必要である。

鍛造品は、様々な工具を用いて金属板を押し滅しすることで成形し、そこに彫金を施すことで仕上げていく。成形方法は、大きく2種類あるようである。ひとつは、一般的に容彫と言われるもので、型紙のようなものを金属板に転写して、押し滅しすることで成形する方法である。ただし、型紙を用いたのか、文様鋳型のようなものを用いたのかは明らかにされておらず、今後の課題として残される。これには伝世品等、状態の良い鍛造品を分析することで明らかにできる可能性がある。もうひとつには、本研究で新たに確認した方法で、金属板に緩やかな湾曲をつけて、外形を研削することで成形し彫金を施す方法である。この方法で鍛造した目貫は、立体感に乏しく扁平な印象を受けるものとなる。

鍛造品の目貫を特定するのは、鋳造品に比べてやや困難である。最も判断できる特徴としては、裏面

の端部がオーバーハングしているかである。端部がオーバーハングしている場合、鋳造品であれば雄型を抜くことができない。また、鍛造品の場合は細かな彫金が施される場合が多い。理論上、鋳造品を二次加工すれば、細かな表現をもつ製品を作り出すことは可能である。ただし、本研究で実見した範囲でみれば、鋳造品に鍍金等を施すことはあっても、彫金を施すことはほとんど見受けられないようである。加えて、管見に及ぶ限り、鋳造品に別途根を取り付けたものは確認できないため、根を取り付けた痕跡（鍛付け・四ツ足等）のあるものは鍛造品である可能性が高い。

III 加工技術

目貫における加工技術は一般に彫金技法のことを指す。彫金には鑿彫による加工と、鍍金等による加工が主に観察できる。鑿彫は管見に及ぶ限り鍛造品にみられるものである。理論上は鋳造品に手を加えることも可能であるが、今のところ鋳造品に鑿彫を加えた事例は確認できない。鍛造品にみる鑿彫には様々な技法がある。この技法については川見典久の著書に詳しい（川見 2016）。技法の種類については明らかにされているが、同様の技法のなかで年代的にどのように推移するかは不明瞭であり、どの技法がいつ頃から出現するかも判然としない。

IV 使用・廃棄・伝世

目貫は、刀装具として基本的には使用される。既往の研究において、目貫は目釘穴に根を差し込んで使用するといった見解が提示され普及した経緯がある（若山 1974）。これについては、12世紀中頃の資料である江ノ上経塚出土短刀（兵庫県立考古博物館 2018）で、確かに目釘の位置に目貫がくるものがあり、当初はそういった用途があった可能性がある。しかし、江戸時代になると、目釘穴の位置に来ないものが散見され、目貫の根も製品の高さより低いものがほとんどであることから、近世における目貫は、形式的な刀装具としての装饰品であるといえる。このことは、目貫裏面をムギウルシで充填し根を埋め殺している事例があることからも追認できる。逆に考えれば、

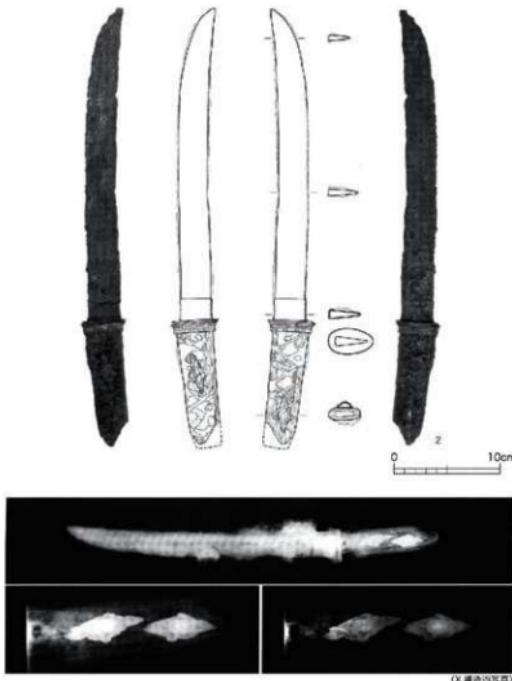


図49 江戸城跡出土目貫の装着位置

根は目貫を刀装具として使用する際には不要なものであることがわかる。よって、どちらかといえば、使用以前である製作段階で何らかの必要性があった可能性が高い。鋳造品にも鋳型の段階で根を備え付けたものが確認できるので、成形時よりは彫金等の段階で必要となるものであった可能性があろう。これについても、今後追求すべき検討課題である。

また、時期が下るにつれて刀装具以外の用途に用いられる場合がある。代表的なものに煙草金具として利用される場合がある。煙草は16～17

世紀頃に日本へ流入したものと考えられ、それとともに煙草入れも普及する。煙草入れは、煙草を入れる懷中とキセルを入れる筒などがセットになっている場合が多く、懷中の留め具に目貫が転用されたものが多く見られる。煙草金具として転用された目貫の裏側には、留め具に取り付けるための突起が2本、根とは別に取り付けられた痕跡が認められる。刀装具としての目貫は2個1対である必要がある一方、小さなものであるため紛失することが多かったと考えられ、片目貫の再利用が一般的になっていたものと考えられる。その他、衣類の留め具等として使用された事例もあるようであるが、根がなければ飾り金具であるのか目貫を転用したものなのかの判別ができない。

目貫の廃棄・伝世について、発掘調査出土事例からみれば、包含層が多く、土坑や溝などから単品で出土する場合が多いことから、役目を終えてゴミとして捨てられた場合が多いようである。一方、大阪城跡や江戸城跡からは刀に装着された状態のものが見つかっているものもある。全体的な傾向として、出土品には鋳造品が多く、伝世品には鍛造品が多いことから、良品が意図的に残され伝世したと考えられる。鋳造品であっても伝世する事例としては、奉納刀があり、法隆寺昭和資財帳（法隆寺昭和資財帳編集委員会 1995）のなかには末永雅雄によると粗悪品が多いようであり鋳造品が多数含まれるものと想定される。奉納等は大名等に限らず一般階級の武士でも行われていることから、そうした階層に鋳造品が広く供給されていたようである。これについても、奉納刀の分析を進めることができれば明らかにできるものと考える。

美術館等に伝世するものの中には、後藤○○作といった作者を特定したかのような製品が多く存在する。目貫は小さな製品であるため、銘のある資料はほとんどなく、作者本人による証明書もほとんど発行されていない。これらの根拠は、後藤家自身が行った鑑定等をもとにしたものであり、真实性に欠ける場合が多い。以下にも記すが、目貫から年代的前後関係を抽出することはできても、作者を特定するのはほぼ困難であると考えられる。

V 分類・編年研究への展望と課題

考古学的に分類を行う上では、各種属性の確認作業が必須となる。本研究では集成作業を実施したが、伝世品を含めて一定数の資料把握を行う必要性がある。現段階で分類を行うには資料の観察が不足しており、さらに資料調査を継続することで分類が可能になるものと考える。

一方、編年作業は分類以上に困難な作業が予測できる。目貫には紀年銘等の年代の定点となりうる資



図50 煙草金具として使用された目貫

料に乏しい。したがって、属性の前後関係を明らかにすることができるても、それを曆年代に当てはめることができが困難なのである。しかし、例えば後藤宗家の作品と思われるものを網羅的に調査し、属性分析することができれば、一定程度の前後関係を見出すことができる。これを概ねの当代と重ね合わせることで、属性変化に年代を当てはめることができる可能性がある。ただし、これについても、目貫が分業体制で製作されていた場合は、その細分も必要になるため、属性の少ない目貫で編年を行うことは非常に困難な作業であると考えられる。よって、目先は製作技法や痕跡の抽出等を入念に行うこと、少しでも多くの属性を把握することが重要である。

附 近世刀装具における極めの諸問題

ここでは、近世刀装具の作者を鑑定する行為である「極め」について、その根拠となりうる情報の整理、および同一作者として極められた資料を三次元計測することで得られる情報から、考古学的視点に基づいて極めの真実性を追求する。

歴史資料において、モノから作者を認識するためには、モノに作者銘が施されているか、作者が発行した証明書等が添付する必要がある。ただし、作者が重要視されるモノは、骨董的価値が伴うことで後世における偽銘資料などが含まれ得る。この場合、同一作者銘等のある資料を集め、諸特徴を属性分析することで、真贋を判断することになる。このような手続きを経て、現代に伝世する歴史資料の中には、作者を特定した資料が残されている。

本稿で対象とするのは、近世刀装具のなかでも、柄に取り付ける装飾品である「目貫」である。目貫は笄・小柄とともに三所物と呼ばれる刀装具セットのうちのひとつである。室町時代以降、後藤家が幕府御用達の金工師として三所物を作り、正装の笄として重宝された。後藤家は、江戸時代末期に至るまで最高峰の刀装金工師として君臨し続けた。他方、江戸時代中期以降には、各地の金工師が良品を製作するようになり町彫として人気を博すようになる。これらの刀装具は、武士らにとって必需品であり、より良品を求める需要から価値が見出され、「極め」が行われるようになった。また、現代においても日本刀剣美術保存協会等による鑑定が行われており、各地に作者が極められた資料が存在する。

目貫には上記の経緯があり、現代に至るまで主に作者による価値が見出されている。一方、小さい資料であるがゆえに、作者銘の伴う資料が少ない。後藤家に関する資料でみれば、作者銘のある江戸時代中期以前の資料はほぼ皆無といって良い。それにも関わらず、博物館や美術館等に後藤○○作と伝世する資料が存在するのは、極めの過程を経ていることだけが拠り所といえる。

そこで本稿では、極めの真実性を追求することを目的に、同一作者に極められた資料に対して三次元計測を実施し、その結果をもとに近世刀装具における極めの諸問題について考察する。

i) 後藤家と極めの歴史

後藤家は、室町時代から江戸時代末期に至るまで、幕府御用達の家彫と称された金工一派である（若山1972）。宗家は17代、そこから派生した脇後藤家等も多数存在する（秋元・笠原1988）。江戸時代には様々な儀礼等で身につける笄に後藤宗家の三所物は最高級品として重宝されたとされる。

しかし、先述したように後藤家が製作したことを証明するには銘や証明書が必要である。以下では、作者の証明に関わる諸事項について事実関係をまず確認する。

i-1) 折紙について

折紙とは、目貫の作品に対して作者や価値を記した鑑定書である。後藤家における折紙発行は、初代祐乗の命日である毎月7日に、宗家を中心とする複数名が集まって極めを行い、折紙を主に宗家蔵で発行した。折紙は作品の鑑定書として依頼者に渡すものであるが、後藤家が管理する台帳（帳）も存在する。折紙発行には手数料が発生し、江戸時代中期以降にはこれが後藤家の貴重な収入源のひとつになっていたとされる（馬場2003）。

折紙で最も古いとされるものは、東京藝術大学附属図書館に所蔵される「後藤家文書」のうちの古帳に記された慶長12（1607）年の6代栄乗によるものである（酒井2015）。また、酒井元樹の帳研究によれば、7・8代までは年間10～15件程度であった折紙発行が、9代程乗以降は年間20件以上となることが示されており、11代通乗～13代光孝の時期には年間100件以上とピークを迎えることが判明している（酒井2015）。これを反映するように、現存する折紙は11～13代によるものが多い。また、傾向として極めの結果は、上三代（～六代）となる場合が多いようである。

この折紙については、いくつかの問題点を含む。まず、折紙=証明書として捉えられがちであるが、あくまで鑑定書であることに注意する必要がある。折紙発行は、最古のものでも1600年頃のものであり、その際極められた作品は約100年遡るものである。この程度であれば、作者による諸特徴が家伝していた可能性はあるが、とくに発行数の多い11～13代の頃には300年近くが経過していることになる。作者を極める際、一定の基準はあったと想定できるが、それを証明する史料等が現存しないため不明確である。つまり、現状折紙を発行した際の鑑定基準を証明することは困難である。ただし、折紙とその作品がセットで伝世したものを利用的に属性分析することで、各代における作者の鑑定基準を推論することは可能となり得る。

次に、折紙での極めがどういった意義をもっていたかを検証する必要がある。折紙の発行は、手数料をとって行われたもので、依頼者からすれば良品として鑑定されることを期待する。この背景には、江戸時代以降になると、三所物が贈与品としての性格を強めることがあるとされる（馬場2003・酒井2015）。結果として、本来は数量的に少ないはずの上三代の作品が多く極められている現状がある。上三代に極められたものは高値がつき、実態にそぐわない形で多く極められている背景には、後藤家・依頼者双方の思惑が絡むことが容易に想定できよう。つまり、後藤家としては鑑定により手数料を得られるため、より多くの依頼を得るために、また依頼者としては古く鑑定してもらえるよう手数料を支払った可能性も考えられる。この解釈が妥当であれば、そもそも折紙による鑑定の真実性が問われることになる。これについては同一人物により鑑定された作品を分析することで、その真意を確認することは可能であろう。

このように、折紙発行は確かに後藤家により行われたものであるが、極めの真実性には乏しい可能性が高い。一方、現在における鑑定等では、折紙や秘伝書によって極められた作者を妥当なものとして、その特徴を作者と繋げて極める見方が強い。折紙は作品と作者を必ずしも繋げるものではないことを強調しておきたい。

i-2) 自身銘と極銘について

三所物には少量ながら作品に銘が施される場合がある。銘には2種類あり、作者自身が施す自身銘と、後代が極めた作者銘をいれる極銘がある。

後藤四郎兵衛家伝來の三所物を分析した吉田正高の研究によると、家伝刀装具のうち銘が施された

ものは37点あるが、自身銘のものは11・12・14・15・17代のみであることが示されている（吉田2003）。また、当主が自身銘とともに極銘を施したもので最も古いものは7代のものである。この結果は、概ね折紙発行の消長・増減とも一致する。

i-3) 江戸時代における目利き書について

後藤家自身がその価値を証明するために折紙を発行していたように、後藤家作品は需要・価値の高いブランド品として社会に位置づけられた。その結果、後藤家だけでなく、一般民衆や脇後藤家によって後藤宗家作品の目利きをする機運が高まり、いくつかの書物が刊行されている。

なかでも『後藤家彫亀鑑』では、絵図や注釈とともに各代作者による作風や意匠別の諸特徴が記されている（島田ほか1973）。これらの諸特徴をどのようにして体系化したのかは不明であるが、後藤宗家は折紙発行に手数料を課していたため、鑑定基準を口外するとは考えがたいことから、おそらく折紙付きの作品等から分析したものと考えられる。分析の過程が不明であるものの、著者なりに後藤家作品を理解しようとした点においては、研究史のなかで捉えるべきものかもしれない。ただし、分析過程が不明で結果のみが記されている以上、それを検証する手立てがなく、結果を鵜呑みにするのは危険であると言える。

i-4) 現代における極め

現代においても、刀装具は美術品的価値が見出されており、鑑定が行われている。主に日本刀剣美術保存協会によるものが著名であるが、その鑑定基準は一般に公開されていない。

鑑定書をいくつかみると、後藤家作品は個人名で極められたものばかりに、古後藤や後藤として極められたものが多くあるようである。つまり、後藤であるらしいことを極めることや、古い後藤家作品であることまでは鑑定する基準があるらしいものの、それ以上を追求するのは困難であるようである。

i-5) 小結

以上、後藤家と極めの歴史を略観した。全体を通して言えることは、自身銘以外の作品について、作者を極めることは困難であるということである。作者自身が作品の特徴を記したもの等が出てこない限り、今後も真実性の高い極めは難しいと考える。

一方、研究対象となりうる課題はいくつか展望できる。まず、折紙は後藤宗家が発行したものであり、折紙付きの作品を統計的に属性分析することができれば、一定程度の傾向を抽出することができる可能性がある。つまり、11代により初代祐乗作と極められたものを多数分析することができれば、11代がどういったものを初代作と考えていたかを明らかにすることが可能であろう。また、仮にその結果にばらつきが出た場合は、手数料が絡んだ真実性に乏しい鑑定を行なっていたことも証明できる可能性がある。

次に、作者を極めることは困難であるが、年代を属性分析から推定することはできる可能性がある。作品に紀年銘を施したものはないが、例えば発掘調査出土資料からおおよその年代を特定することができ、それをもとに属性の有無を検討することで、その消長を追える可能性がある。また、同一意匠における型式学的検討を進めることで、前後関係を明らかにしていくことも可能となり得る。すでに、川見典久が獅子図目貫の肋骨表現から型式差を抽出する分析を行なっている（川見2012）。これが年代差・技法差を反映するかの判断はより多くの分析を必要とするが重要な視点である。

以下では、課題のひとつとしてあげた同一鑑定者により同一作者に極められた同一意匠の作品に対して、三次元計測を行い、極めの真実性の追求を試みる。



図51 黒川古文化研究所蔵伝後藤栄乗作目貫（三次元計測図は1/1）

ii) 伝後藤栄乗作目貫の三次元計測と検討

ここで比較検討するのは、西宮市黒川古文化研究所蔵の伝後藤栄乗作目貫2組（黒川古文化研究所2010）であり、それぞれ表目貫・裏目貫が同一意匠の龍であるものである。いずれも後藤宗家15代の後藤光美（1780～1848）により栄乗（6代：1577～1617）に極められている。異なる点は、極めの日付が約1年違うこと、地金が金と赤銅で異なることである。材質は異なるが、いずれも同一代金で極められており、金と赤銅という地金による価値の差はなかったようである。ここでは、黒川古文化研究所の管理番号により、金製のものを310、赤銅製のものを475として番号表記する。

ii-1) 各目貫の観察所見

310は金製であり、裏面をみると細かな打ち込みに起因する凹凸が観察でき、端部がオーバーハングしていることから、鍛造技法による容形によって製作されたものである。裏面にみる打ち込み痕跡は非常に細かく、滑らかな曲線で凹凸するなかにも、細かな打ち込み痕跡がみられる。抜け部分は表面から打ち抜いているが、細部まできっちり抜いており、数も多い。金属板の厚さも0.1cm以下となる部分があるほど非常に薄く仕上げられている。裏面の根は長方角柱で四つ足で補助し鍼付けする。

表面の彫金は、鱗一枚ずつを丁寧に段差をつけながら表現するもので、線彫で区画するだけのものとは異なる。また、脚の関節・角・蹄部分には鱗で細かく打ち込んだ痕跡が観察でき、細部に至るまで丁寧な彫金を施している。

475は赤銅製であり、裏面に打ち込み痕跡、および端部がオーバーハングすることから鍛造技法による容形で製作されたものである。裏面の打ち込み痕跡は明瞭に観察できるが、310に比べてやや面をもつようにして打ち込まれている。抜け部分もあるものの、数は少ない。地金の厚さは約0.1cmと厚くはないが310ほど薄いものではない。また、裏面の端部には粗い鍼で削った擦痕が観察できるが、根の頂部にも同様に及ぶことから後世に二次加工されたものへの可能性もある。

表面の彫金は、鱗を段差表現するなど細かな技法がみられる一方、脚の関節等に施される彫影は310に比べてやや粗い。また、目の部分には鍍金を施している。

ii-2) 三次元計測と比較検討

ここでは、SiMによる三次元計測で得た情報をもとに両者を項目ごとに比較検討する。

形：鍛造技法による目貫の製作方法は未解明な部分が多いものの、型紙を用いて大枠を成形して彫影を施した可能性が高い。したがって、同じ型紙を用いて製作すれば、大枠は一致すると予測される。

そこで、310・475の計4点を同一意匠ごとに重ね合わせを行なった。その結果、両者ともに完全に一致することはなかった。310-1・475-1では尾の角度を中心に各部の稜線がやや異なっている。一方、310-2・475-2は前者に比べて一致率は高いようであるが、細部は微妙に異なる。

鍛造方法：いずれも端部がオーバーハングすること等により、鍛造技法で製作されている。ただし、310では裏面の打ち込みが丁寧であり、面を持たず滑らかな曲線となっているが、475ではやや打ち込みが粗く、面を複数箇所で観察できる。裏面の打ち込み方には両者に大きな差が認められる。また、抜けの数は310のほうが圧倒的に多く、丁寧に整形している。

根の取り付け方法：裏面には全てに根が取り付けられている。いずれも四つ足による補助を行なっており、技法に大きな差は見出せない。しかし、根の取り付け位置は、同一意匠のもの同士で比較すると異なっている。

彫金：材質は異なるものの、彫金の技法や施し方に大きな差は見出せない。いずれも細部に至るまで彫

金を施している。ただし、若干475のほうが観察所見として粗い彫金であるように感じる。

ii-3) 評価

以上、黒川古文化研究所蔵伝後藤栄乗作目貫の比較検討を行なった。その上で、比較検討した両者が同一作者の作品であるかを考察する。

まず、型紙の存在の有無が結果を大きく左右する。現状、このような複雑な意匠である目貫は型紙がなければ綺麗に形作るのが困難であると考える立場から、型紙の存在は肯定する。それであれば、今回検討した両者は、誤差を超える範囲での差が認められたことから、同一型紙を用いたものではないと判断できる。しかし、同じ作者が複数の型紙を所持していたのであれば、これをもって作者が異なるとは言えない。

次に、鍛造技法の特徴であるが、両者は打ち込み方に大きな差が認められた。材質が異なるとはいえ、大枠の打ち込み方や抜けの施し方に違いがあることからみて、同一人物が製作したものではない可能性が高い。このことは、根の取り付け位置の違いからも補足できる。

彫金技法については、大きな差が認められず、省略等も前後関係が追いづらいことから、比較的近い時期の製作であると考えられる。

以上の点をまとめると、同一人物による作品ではない可能性が高い。したがって、いずれかが後藤栄乗作である可能性はあるが、両者とも栄乗作である可能性は低い。

iii)まとめ

本稿では、黒川古文化研究所蔵伝後藤栄乗作目貫2組を三次元計測を用いて比較検討することで、その真実性を追求した。その結果、両者は形状・技法的特徴に差異を見出すことができ、同一作者によるものではない可能性が高いと判断した。

仮に、後藤家による目貫の生産体制が当主の手を離れ、分業体制で製作されていたとしても、形が異なることはあっても技法的特徴は一致する可能性が高いため、そこに差が見出せるということは、異なる生産体制によるものであると判断できよう。もし同一当主のもと、様々な職人が雇われ分業体制により製作されていたのであれば、当主を極めることはもちろん、年代等を絞り込むのも困難となる。現存する作品数や、伝後藤宗家とされる伝世品の形態的特徴からみても分業体制での大量生産は考え難く、基本的には宗家の当主自身が中心的に製作を担っていたと考える。

また、今回得た結果は、後藤光美が極めた結果と異なるものであり、光美がなにをもって両者を栄乗に極めたのかか問題となる。両者の技法的差異は明らかであり、筆者が当初想定したような利益関係の問題が背景にある可能性が高まったともいえる。

課題としては、型紙を想定しながらも、完全一致するような作品との比較検討を追求しきれなかつたため、今後各地の同一意匠資料を計測することで、その有無を明らかにしたい。これにより、作者等を極めていくことも可能となり得る。

第IV章 総 括

本研究では、発掘調査で出土した目貫をもとに、その製作技法を明らかにすることを目的とした。この目的を達成するために、これまで研究対象としてほとんど挙げられてこなかった近世刀装具、なかでも目貫の実態を把握することを優先し、資料集成を行なった。その結果、全国各地の中近世遺跡からの出土を確認することができた。ただし、集成は未完成であり、実見できたものも一部であることから、抽出した情報に誤りがある可能性を含む。これは今後調査を継続することで更新することを課題としている。

次に、集成したなかでとくに重要と判断した資料の調査を実施した。調査では短時間で多数記録する必要があることから、SiM を用いた三次元計測を利用した。これにより、限られた時間のなかで必要とする情報を得ることができた。ただし、精巧なつくりである目貫に対しては、より高度な計測（撮影枚数・角度の調整・深度合成等）を行うことが、より良いデータを得られることがわかつており、限りある時間のなかでどこまで追求しながら計測していくかは今後の課題である。

実際に資料調査を行なった結果、これまで目貫は鍛造品が主体であるとされてきたが、発掘調査出土資料の多くは鍛造品であることが明らかとなつた。これは、広く一般層には鍛造品が出回っていた可能性を示唆する結果である。一方、京都市内出土資料では鍛造品が優位であり、金工技術の中心では鍛造品が他地域に比べて多く出回っていた可能性を含む。また、東京都内出土資料のなかには、真鍮製の目貫を確認することができた。しかし、真鍮製品を製作したとみられる奈良町遺跡出土鉄型とは一致せず、真鍮製目貫は奈良町遺跡以外でも鍛造されていることが明らかとなつた。

また、観察を行うなかで、鍛造・鍛造品それぞれの痕跡を確認することができた。報告で示した観察所見は、今後の目貫を含む刀装具を分析する上で、鍛造・鍛造を判断するひとつの目安となることが期待できる。ただし、鍛造品については、鍛造であることは判断できるものの、どのような方法を用いて行なつたのかを明らかにするには至っていない。本研究では2種類の鍛造方法を確認することができたが、とくに型紙の有無等については三次元計測を応用していくことで確認できる課題である。

第III章では、目貫の基礎的研究を簡潔にまとめた。今後さらに加筆していくなかで、最終的なまとめを行なっていくことが課題であるが、製作から廃棄に至る過程で、目貫がどのように扱われてきたのかを示した。とくに使用方法や二次加工については検討が不十分であるため、今後の課題として取り組みたい。また、附録として後藤家の極めについても考察した。同一人物により同一作者に極められた、同一意匠という比較検討しやすい資料をもとに、極めが必ずしも技法等から真実性の高いものではないことを提示した。すなわち、後藤家製品であっても資料に残る痕跡をもとに一から分類等の基礎研究をやり直す必要性がある。後藤家製品と思われる資料は多く伝世しているため、同一意匠の資料を多数分析することで一定の傾向を抽出できるものと考える。この点も優先的に取り組むべき課題である。

以上、課題が多く残る研究結果となつたが、本研究により発掘調査出土資料の重要性を位置づけることができた。中近世刀装具については資料に基づく基礎研究の必要性を改めて浮き彫りにすることができた。

図版出典

- 図1・3～15：筆者撮影・作成（奈良市教育委員会所蔵）/図2：（奈良市教育委員会 2018）/図16～26：筆者撮影・作成（神戸市教育委員会所蔵）
図27～35：筆者撮影・作成（京都市埋蔵文化財研究所所蔵）/図36～46：筆者撮影・作成（東京都教育委員会所蔵）/図47・48：筆者作成
図49：（東京都埋蔵文化財センター 2009『江戸城跡・北の丸公園地区的調査-2』）/図50：筆者撮影（間見史氏所蔵）
図51：筆者撮影・作成（黒川古文化研究所所蔵）

引用・参考文献

- 秋元潔雄・笠原光寿 1988『京後藤の研究』
- 川見典久 2012『金工工芸の小宇宙・高精細画像でみる刀装具-』『高精細画像による文化財研究』2 関西学院大学博物館開設準備室
- 川見典久 2016『刀装具ワンドーランド』創元社
- 久保智康 2009『金工の歴史～その技と藝術性～』『金工の技と美 金属製品にみる一乗谷』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 黒川古文化研究所 2010『刀装具』
- 酒井元樹 2015『刀装具—源氏後藤家の鑑定 案板（鑑定控）の整理に基づく鑑定の様相と価値付けの考察』
- 鳥田貞良ほか 1973『刀装具全後藤家十七代』雄山閣
- 津市教育委員会 2009『多気北畠氏遺跡第30次調査報告- 上多気六田地区第4次-』
- 奈良市教育委員会 2018『平城京跡（左京四条六坊六門）・奈良町遺跡の調査 第688次』『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成27（2015）年度』
- 馬場章 2003『金工後藤家による御家形の実証的研究』平成13～14年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書
- 兵庫県立考古博物館 2018『装飾大刀と日本刀』
- 法隆寺昭和財團編集委員会 1995『法隆寺の至宝11 西円堂奉納品・武具愛護りはか』小学館
- 宮里修 1998『近世刀付属具について』『千軒ヶ谷五丁目遺跡- 2次調査報告書・新宿駅貨物跡地再開発に伴う事前調査-』千軒ヶ谷五丁目遺跡調査会
- 村瀬隆 2019『刀装具鋲型の三次元分析からみた近世铸造技術の研究』
- 吉田正高 2003『後藤四郎兵衛家伝来の刀装具について』『金工後藤家による御家形の実証的研究』
- 若山治珠 1972『刀装小道具講座 後藤家編』雄山閣
- 若山治珠 1974『刀装小道具講座 用語解説・資料編』雄山閣

*集成に関わる文献一覧は表に記載

三次元計測を用いた近世刀装具製作技術の考古学的研究

2019年度科学研究費（奨励研究）研究成果報告書

研究課題番号：19H00013

研究代表者 村瀬 陸

(奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター)

発行日 2020年3月16日

